
壊れたココロ

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壊れたココロ

【Nコード】
N2268B

【作者名】
鷹嶺綺羅

【あらすじ】
明光学園に入学した桜井美奈子の前に現れた不思議な少年。それは、とんでもない学園生活の始まりを告げるものだった。

壊れたココロ その1

「一年戦争【いちねんせんそう】」

有史以来、人類が遭遇した対魔族・対妖魔戦では最大規模。

長野・新潟周辺が主だった戦場となり、50以上の市町村が全滅。両県に壊滅的被害をもたらした。国連軍120万人が参戦。人類史上最悪と評される戦いを繰り広げた。

民間人を含めた死者・行方不明者は150万人以上とされる。」

「魔族」

異世界に住む存在。古くより「悪魔」と忌み嫌われた存在。高位魔法騎士並、またはそれ以上の能力を持つとされる」

「妖魔」

魔族と共に異世界に住む存在。古くより「怪物」「妖怪」と呼ばれる。魔族に使役されている模様だが、時折、自らの意志で我々の世界に介入することがある。」

「魔法」

一種の奇跡。魔導師や魔法騎士など、ごく限られた存在が使用する事が出来る」

「騎士」

一種の超人。通常の人間の数十倍の運動能力を発揮する。古くは「貴士」（「貴き（たつとき）士」と呼ばれた」

- 以上、言泉2000年版より

桜井邸

『。。。軍の最後の駐留部隊が撤退することで、一年戦争に派遣さ

れていた国連軍は全てが日本より撤退したことになります。 - では、次のニュースです」

「美奈子、忘れ物は？」

「ないわよお。入学式からそんなドジするわけないでしょ？」

美奈子はテレビから視線をはずさず、母親に気のない返事を返した。

テレビで情報をチェックしながら、トーストを紅茶で胃に流し込むのがいつも美奈子の朝の日課だ。

同じテーブルで座って、新聞から目を離さずにコーヒーを飲んでいる父親の遺伝だと、美奈子はそう思っている。

「小学校の入学式でランドセル忘れていったのは誰だったかしら？」

「いつの話よお」

『芸能ニュースです。今日、アイドルが多数通うことで知られる明光学園の入学式が行われますが、その中でもデビュー一年目でトップアイドルの仲間入りを果たした瀬戸綾乃と観月唯香のダブル入学で、例年以上に盛り上がって』

「あんだ、明光学園で本当によかったの？あんだのアタマならもつと別の」

「いいのよ。近いし」

「……まあ、あんだがよければそれでいいんだけどねえ」

「誘いがあった芸能コースまで蹴ったんだから、よほどの覚悟だろう。さすが私の娘だ」

ようやく読み終えた新聞をたたみながら父が頷きながらそういつてくる。

「……あんまり褒められた気がしないけど、結局、私自身が何をしたいかってことでしょ」

「で、何がしたいんだ？」

皮肉が通じないのはいつものことだ。

この鉄面皮こそ、社会で生きていく条件なのかもしれない。

美奈子は紅茶の残りを飲み干しながら言った。
「それを見つけないのよ」

4月2日午前10時35分
以下、瀬戸綾乃の日記より

入学式。

お仕事の合間を見て、なんとか間に合うようにって、マネージャーさん達にも何度もお願ひしていたけど、やっぱり無理だった。学校に到着した時にはもう式が始まっていた。

入り口に立っていた先生に謝って、席を教えてもらう。

まわりがすごくざわついて、私の名前が何度も聞こえてくる。

やっぱり、遅刻してきたから目立ったな。

何とか、平静をよそおって席に着けた。

最初は校長先生のお話。

一年戦争が終わったばかりだもの。校長先生のお話もそこから始まった。

一年間、たった一年間で何十万人って人が死んだ戦い。

しかも、相手は人間じゃなくて、妖魔とか魔族っていわれるオバケ。

たくさん、本当にたくさんの方が死んだ。

毎日、いつあのオバケに襲われるかって、みんなでおびえていたことが思い出される。

校長先生もおなじようなことを言われた後、私達にもあの絶望的な状況を戦い抜いた人類の一員として胸を張ってがんばってほしいっていわれた。

芸能コースの私にはよくわからないけど、私達芸能コースや普通の子達の一般コースとは違う制服の人達が、少し気になった。

騎士養成コースの人達だ。

よく知らないけど、ものすごい力持ちで、すごく速く走れる人っ

て感じかな。

一年戦争で人類を代表して戦って、そして死んでいった人達。
あの人達も、いずれはそんな中で戦うのかなと思うと、なんだか
かわいそうな気すらする。

式が終わると教室へ。

新しい制服と新しい教科書。

私もがんばらなくちゃ。

でも、入学式なのに、私の斜め前の席がポツンと開いていたけど、
入学式にこれない子もいるんだな。私もこれなくなる一歩手前だっ
たからな。他人の気がしない。
なんだかかわいそう。

桜井美奈子の日記より

昨日の入学式から一夜明けた今日、教室に入ったら瀬戸さんが気
分が悪いようで机に突っ伏していた。

普通コースの男子生徒達が何人か声をかけていたけど、心から心
配して瀬戸さんに声をかけていた人はいなかった。

みんな、アイドルとしての瀬戸綾乃と話ができたことだけ喜んで
いる。

一々、律儀に「大丈夫」と答える瀬戸さんの、寂しそうな顔がみ
ている私もつらかった。

あまりに気の毒だから、保健室へ行くように瀬戸さんに声をかけ
た。

「瀬戸さん。保健室行ったほうがいいわよ？」

その声に、瀬戸さんは苦しそうに顔をあげたけど、私の名前が思
い出せないみたいなので、自己紹介してあげた。

「私、桜井美奈子」

「あつ……瀬戸綾乃です。よろしく願います」

「こちらこそ。……じゃなくて！具合悪いんでしょ？保健室に行こ。何なら肩貸してあげるから」

そしたら、瀬戸さんは首を横に振った。

「大丈夫です。これ、持病みたいなもので、しばらくおとなしくしていれば、そのうち」

「本当に？」

瀬戸さんにこれ以上話をさせるのはかわいそうだったので、私は瀬戸さんの斜め前の席の椅子に座ってしげしげと瀬戸さんの顔を見つめた。

本当に綺麗な子だと思う。

去年デビューしてすぐにトップアイドルの地位に上り詰めたのは伊達じゃない。

しかも、少しやつれた表情が、何となくなまめかしさすら感じさせる。

「時々ですけど……」

私が次ぎの言葉を探していると、誰かが私に声をかけてきた。

「あの」

振り向くと、女の子が困った顔で私を見つめていた。

女の子？

首から上は確かに女の子だ。

髪はボブカットに近いショート。かなり整っている顔立ちに大きな瞳が印象的。

とても同じ年にみえないけど、かなりかわいい。今度デビューするモデルかアイドルなのかと思っても、この学校に通っている人に非難される筋合いではない。

全体的な雰囲気はおっとりとした、いかにも良家のお嬢様って感じかな。

男子の制服を着ているのが気になるけど……。

「そこ、僕の席」

つまり、どいてくれといたいたらしい。確かに、勝手に席に座っているのは私の方で、非は私にある。

「ごめんなさい」

「……」

席が空いたのにこの子はじつと瀬戸さんを見つめていた。

そして、

っん。

突然、瀬戸さんの頭を突きだした。

「ねえ」

っん。

「ねえったら」

トップアイドル瀬戸綾乃の頭を突いたなんて非常識もいいところだ。

しかも、

「ねえ」

ぐりぐり

「!!」

瀬戸さんのつむじを指でぐりぐりやりだしたんだ。

瀬戸さんもたまらず苦しそうな顔を上げる。もう、精一杯といった動き。しかも、さっきより顔が悪い。もう真っ青だ。

「……いつも、こうなの？」

「え？」

「具合、悪いでしょ？」

「え？はっ。はい……でも」

「僕が近くにいるから普段よりひどいはずだよ？」

そういつて、この子は瀬戸さんの頭に手を乗せた。

「っっ！」

瀬戸さんが痛そうに頭を抱える。

私は途端に抗議の声を上げようとして、言葉にならなかった。パンッ！

紙風船が破裂したような音が教室に響く。辺りを見回すとクラスメイトが私達に注目していた。誰かがいたずらしたのかと思ったけど、その音は瀬戸さんの頭のあたりで響いていた。

どうということ？

瀬戸さんもきょとした顔で頭に触れていた子の顔を見つめていた。

「……痛み、消えたでしょ？」

「え？……えっ、ええ」

「じゃ、大丈夫だね」

「あつ。ありがとう……」

「うん」

そういうと、その子は何もなかったように自分の席についた。

「ねえちょっと、どうということ？」

この子は、じつと私の顔を見ると、つぶやくように言った。

「霊障……信じる、信じないは別だけどね」

その子はそういうと、鞆から鉛筆などを取り出し始めた。私のことは眼中にないようだ。

私がさらに質問しようとした所で、先生が入ってきた。

「昨日、残念ながら入学式に参加できなかった者がいるので、ここで挨拶させておく」

先生はそういつて黒板に誰かの名前を書き始めた。

水瀬悠理

女の子の名前だと思った。

昨日、いなかったのはさっきの子だけ。でも、さっきの子は男子の制服を着ている。

？マークが頭をいつたり来たり。

「水瀬、前へ」

「はい」

先生に答えて教壇に立ったのは、やっぱりさっきの子だった。

よく聞くと、この子の声って、透き通っていて、とてもよく響く。
「水瀬、簡単でいいが、自己紹介してくれ。名前と出身中学、それと、趣味くらいでいいからな」

男の子だったんだ。

水瀬って呼ばれた子（彼？）は、ちよつと考えた後、続けた。

「水瀬悠理です。長野県滝川中学校卒業です」

長野県の滝川って、一年戦争で最前線だった所だ。

「えっと、趣味は」

口ごもったあたり、いろいろあるのかなと思ったけど、でてきた言葉は

「昼寝ですね」

……何、この子。昼寝って趣味？

「昼寝？」先生も呆れ顔で聞き返していた。

「はい。昼寝」

「……無趣味っていうんだ」

「そうですか」

本人は大して答えた様子もない。

「コホン。気を取り直して。名前と外見が女の子みたいだが、一応、れっきとしたオトコだ。それと、制服からわかると思うが、騎士養成コースに所属。配属分隊は、一人で気の毒だが、第四分隊だ」
騎士養成コースに所属する何人かの生徒達がザワツって騒ぎ出した。

第四分隊？

「せつ。先生、それってホンマでっか？」

お祭り好きな品田君が立ち上がって言った。

「このチンチクリンなのが？」

「チンチクリン………というのはどうかと思うが」

「センセ、冗談キツ！第四分隊所属っつーたら、アータ」

「品田。その通りだ」

ざわめきは大きくなるばかり。私達一般コースや芸能コースの子

達は何がなんだかよくわかないできょんとするばかり。

「うるさいぞ！静かにしろ！」

先生から叱られた。

「芸能コースや一般コースの生徒達は知らないかもしれないが、騎士養成コースで第四分隊に配属されるのは、魔法騎士だけだ」
初めて納得できた。

魔法騎士。

ただでさえ凄い騎士のさらに上に行く存在。

騎士の運動能力で移動し、魔法を繰り出す。

一年戦争でマスコミをにぎわせた世界最強の騎士達。

それが魔法騎士。

初めてナマでみた。

「ま。希少種だがみんな同じクラスメートなんだから」

「そんなことはどうでもいいわい！」

興奮した品田君が先生の声を遮った。

「おい、水瀬とか言ったか。おまえ、ホンマに魔法騎士か？」

水瀬君は無言で頷いた。

「ホンマ胡散臭いわ。ランクは？」

「申告ではA A / A A / A Aだ。一般騎士でも滅多にいないスペックだ」

そういったのは先生。騎士養成コースの教官を兼ねてるから、興奮している様子。

「申告ではあ？なんや、ダレかにハクつけてもらったんか？」

「申告は水瀬の父親と、他にも数名いるか？」

「なんや、パパにハクつけてもらったんか」

生徒達からは失笑が漏れる。

「水瀬の父親は」

先生はおもしろそうにもったいつけて続けた。

「水瀬由忠。こっちでの身元保証人は饗庭樟葉といえは納得できるか？」

教室がシンって静まりかえった。

品田君もなんだか青くなっている。

「水瀬って、あの水瀬家で、しかも近衛の筆頭二人が保証人ツスカ？」

「そうだ」

「あの——」

水瀬君はここでもうやく口を開いた。

「父や樟葉さんのことって、ここでは関係ないのでは」

「そんなことない」

先生は手を振って否定した。

「一年戦争にもかり出されて生きて帰ったんだろ？お前。しかも上に超のつくサブレットの家柄の出じゃないか。水瀬、おまえの実戦経験とそのレベルにはみんな期待しているんだ。俺とかな」

「はあ……」

水瀬君はなんだか、困ったような顔をしていた。

お昼

水瀬君はどこかで食事かな。教室にはいない。

興味があつたので、騎士養成コースの木村君にいろいろ聞いてみた。

木村君の話をまとめると、水瀬君の家は、代々、近衛騎士団の中核を占めるような有名な魔法騎士をたくさん輩出してきた。日本で「騎士の名門」と呼ばれる家柄の中でも知る人ぞ知る名門中の名門。近衛騎士団左翼大隊がまだ陰陽寮つていわれていた頃からこれを取り仕切っていたというから歴史的には確かに名門だろう。

で、現当主も左翼大隊筆頭。本当ならば近衛の最強騎士を示す総隊筆頭位をとって当然とされる人物という。

お昼休みが終わる頃に水瀬君は戻ってきたけど、どうにもかわいらしいその外見から、魔法騎士っていうんだか「コワイ」イメージはどうしても結びつけることができなかった。

きつと、かわいらしい娘が実はヤクザの娘だって知れた時も似たような感想を持つのかな。

……気になる。

4月12日 桜井美奈子の日記より

入学式から一週間以上。

一つ、とても気になったことがある。

水瀬君のことだ。

水瀬君、友達がない。

いつも一人でポツンとしていて、移動教室も、お昼も、いつも独りぼっち。

誰も、水瀬君に話しかけようとすらしない。

騎士養成コースのクラスメートですら。誰もだ。

騎士養成コースの中村さん達と話していたら（おなじ騎士ですら！）、みんながどういう目で水瀬君を見ていたか、はじめてわかった。

「だってさ。普通の騎士っていうならさ。力が強い位でわかるけどさ。あいつ、魔法騎士だぜ？下手なこととして魔法で殺されたらたまらないじゃん」

「でも、クラスメートなんだし」

「じゃ、美奈子は、クラスメートっていうなら、魔族や妖魔みたいなバケモノでも仲間っていえるわけ？それこそヘンじゃない？」

「バ、バケモノ？」

「そう。魔法騎士ってね。ようするにはバケモノだよ。バケモノ。戦争の時、あいつらがどんなことしたか知ってるだろう？」

「かわらないほうがいいよ。って何度も忠告された。

同じクラスメートなのに。」

水瀬君が、私達に何をしたっていうの？

それに、魔法騎士の人達だって、みんなを守るために戦って、死んでいったっていうのに！！

何か、腹が立ったから、私の方から水瀬君に接触した。

水瀬君は、机で何かを熱心にいじっていた。

「水瀬君」

「？」

きょとんとした顔で私の顔を見る水瀬君。ほんとにかわいいんだよね。この子。

「何してるの？」

「うん。さっき拾った袋の中にあつたんだ。ほら」

よく見ると漆塗りの筒みたいなもの。

「何？」

「雅楽で使う笙の一部だね。なんでこんなところに落ちていたかはわからないけど」

「高いの？」

「かなりのものだね。よく手入れされているし。年代物」

「探偵小説みたいないい方ね」

「うーん。知的な仕事に就く中年の男性で、最近散髪に行った。妻の愛情は離れているとかって？」

「さすがだよホームズっていつてあげる」

「僕は金田一モノの方が好きなんだけどね」

「私はホームズ。イギリスの雰囲気が好き」

何だ。結構、気楽に話せるじゃない。

「えっと、何か用？」

「ううん。用ってほどじゃないけど、何してるのになって」

「ヒマしてる」

「友達とかいないの？」

「……うん」

頷く水瀬君、とても寂しそう。

「次、移動教室よ？よかったら一緒にいかない？」

水瀬君、きょんととして、私を見ると、うれしそうに頷いた。

「いいよ」

「決まりね」

本当、普通なんだけどなあ……。

壊れたココロ その2

桜井美奈子の日記より

移動教室の後は体育。というより体力測定。
当然、私達と騎士は別。

生で騎士の人たちの動きを見たのは初めてだったので、体育の間中、ほとんど私は見学状態。「授業に集中しろ」って先生に怒られた（
^ー^;）

最初、校庭の隅に立てられたポールの意味がわからなかったけど、よく見たら走り高跳びのポールとバーだった。

高さは10メートル以上。

騎士養成コースの人たちが器用に上って行ってポールを設置。

みんな楽々とクリアしていく。

アゼンとしてみているしかなかった。

あんな高いトコロにあるものを、みんな平気な顔して飛び越えていくんだもの。

私が超えられなかった1メートル50なんてものじゃない。

特にすごいのが水瀬君と草薙君。後は御劔さん。

草薙君は1メートル80センチ近いし、御劔さんも女の子だけど175センチの堂々とした体格。

対して水瀬君は150センチもない小柄な体。

でも、水瀬君は一つたりとも、草薙君や御劔さんに負けていない。ほとんどが20メートルで脱落したのに、この三人はその後も次々と高くしていった。

「23！？ダメやダメや！30いけや！」

「ちよつと！測定なんだからきちんとやりなさいよ！」

「なんや、涼子、30も飛べへんのか」

「なんですつてえ！？」

結局、34メートルで御劔さん。34・5メートルで草薙君がバーを落とした。

35メートルを超えられたのは水瀬君だけ。

「運動神経じゃなくて、もう常識・非常識の問題な気が」って唯ちやんがいつていたけど激しく同意。

ただ、水瀬君、着地に失敗して保健室送りになっていたけど……（――）。

「あいつ、絶対魔法使ってた！」

水瀬君がタンカで運ばれていった後、クラスメートの数人が騒ぎ出した。

「じゃなきゃ、あんなに飛べるはずがない！」

「あいつキタねえ！」

というのが彼らの言い分。

特に新井君かな。20メートル超えられなかったのが悔しかったんだろう。一番怒っていた。

「自分が越えられなかったことを、他人のせいにするのはどうかと思うぞ。新井」

「ぐっ」

南雲先生にたしなめられて悔しそうに先生をにらむ新井君だけど、南雲先生は新井君を無視するように、草薙君をチラリと見た後、言った。

「草薙、オマエはどう見た？」

「……アイツ、そこそ本気やったな」

草薙君はつまらないって顔で校庭にねそべりながら続けた。

「着地も魔法がどうこうやからやない。アイツ、何かを避けようとして失敗したんや」

「何かってなんだよ！わかるようにしゃべれよな、草薙！」

「バカでもわかるようにしゃべってるつもりやで？」

「んだとお！？」

「大体、魔法を使ったら、着地じゃあんな無様な失敗になるんか？」

授業の後、水瀬君が新井君達に更衣室で殴られそうになった。

何でも、魔法を使って測定をごまかしていたという新井君に、水瀬君は「使っていない」と否定したのに、「気に入らない」といつて、新井君が水瀬君に殴りかかり、秋篠君や草薙君に取り押さえられたというか、草薙君に殴り倒されたという。

「ジャンプ力を高める魔法なんて知らないよ」というのが水瀬君の言い分。

結局、魔法騎士に対する偏見が新井君にああいう行動をとらせたってことか。

「大変だったね」

「ああいうの、もう、慣れてるから」

放課後、掃除当番をしながらそんなやりとり。

「さみしくないの？くやしくないの？私だったら絶対イヤだよ」

「僕たち魔法騎士は、そういうものなんだ。力があるってことは、そういうことなんだ」

「水瀬君……」掃除の手を止めて水瀬君を見つめる。

「忌み嫌われるくらいで丁度いいって、そう思う」

水瀬君は机を運びながら、なんでもないって顔。

「そんな！」

「……そう思うことにしてるんだ。でなければやっていけないから私に背を向けていたのがきつと幸いしていたとだろう。」

私は、そんなことを口にした水瀬君の表情を見ずに済んだ。

掃除が終わって、秋篠君と合流。

新井君のことで渋い顔した秋篠君をなだめすかして、さて。どこへ行くのかしら。

マックにでもいこうかな。

「買い食いは悪いことだぞ！」

小学生か、あんたは。と、真顔で言い切った博雅君に心の中でツッコミいれておく。

「でな。父上も大騒ぎで。」

入学試験の翌日、博正君の家であったある事件について博雅君とやりとりしながら廊下の角にさしかかった時。

「きゃっ」

よそ見していたから誰かとぶつかって転んでしまった。いった〜っ！

おしりをさすりさすりぶつかった相手を見上げる。

青い袖章だから三年生。ボブカットのキツイ顔の人だった。冷たい、どこまでも冷たい感じの人。

中学時代の私の先輩だと気づくのに、少し時間が必要だった。

すらっとした理想的な体型も、整った顔立ちも、すべてがその冷たさで台無しになっている。

そんな印象。

中学時代は、もっと明るくていい人だったのに……。

先輩、変わったな。

「すつ。すみません。すみません！」

怖かったから立ち上がって平謝りに謝る私。

「……」

でも、先輩は何も言わずに立ち去っていった。

私も、かける言葉を失っていた。

まるで、私なんて知らないって感じ……。

どうして？

「大丈夫か？」と博雅君。

「ええ。でも、さっきの。」

「あの人には関わるな」

どういうこと？

聞き返したかったけど、おしりのあたりに何か違和感。

後ろを振り返ると

「大丈夫？痛くなかった？」

なぜか水瀬君の声がおしりのあたりから聞こえる。

……へ？

みると、水瀬君、私のおしりをなで回してる。

「痛い痛い飛んでけっ」

ゴチっ！

思い切り振り下ろしたカバンの角が水瀬君のアタマを直撃した。

「ええ。とんでったわよ！君のアタマにね！」

「……こいつ、魂がどこかへ飛んでったんじゃないか？」

ジョーシキがどこかへ吹っ飛んでるのよ！元からね！

水瀬君、保健室送り本日二回目。

「お世話になりました」

ぺこっとアタマを下げて保健室を出た私達は、まだ涙目の水瀬君を

引きずるようにして下駄箱に向かった。

「おまじないしただけなのに」という水瀬君は本気でそういつつもりじゃなかったとはいえ、バツとして一週間、お昼おごらせることに決定！

この私の温情に永遠に感謝なさい！

「で、博雅君、さっきのことだけど」

「沼田先輩のことか？」

博雅君の説明を箇条書きするところなる。

- ・さっきの先輩は沼田恵美子先輩。
- ・美人だが、性格が暗いせいで周囲にとけ込めず、ようするにイジメられていた。
- ・そのイジメはかなりのものだったらしい。
- ・ある日、彼女を特にイジメていた女生徒数名が交通事故で死んだ。
- ・それ以来、彼女をイジメていた生徒が次々と死ぬか大ケガしている。

- ・死者だけで7人。けが人はその倍近く。
- ・あまりに被害がひどかったせいで、クラスが呪われているなんて噂が飛び交い、事態は緊急のクラス替えや担任の辞職までいったらしい。

- ・彼女に関わると死ぬっていうもっぱらの噂になっている。

なんだが、無意識に水瀬君の横顔を見つめた。

何もしていないのに、いじめられて、そんな噂がたった。今でも。

それってまるで・。

事件は、この後起きた。

私達は下駄箱で、騒ぎの第一報を聞いた。

男子生徒が窓から落ちたという。

先生達は大騒ぎ。

保健室の先生が血相を変えて走っていったから、後をついていこうとして怒られた。

向かった先は理科棟。4階建ての学校で一番新しい建物。

近づこうとしたら先生達が生徒を追い散らしていた。

「生徒はすぐに帰りなさい！」って。

すぐに救急車が来て運ばれていったけど、どうやら新井君とそのお兄さんらしい。

さすがに心配。

追伸 さっきの袋は、博雅君のものだと判明。

お礼代わりにラーメンをおごってくれました（正しくは、水瀬君がおごせたというべきだけど……ゴチになりました（・ー・））

夜、美奈子の携帯に、中学の同級生だった未亜から電話があった。何かと思ったら、新井君のことだという。

ゴシップ好きな子からの情報だから、美奈子は話半分で聞いてあげることにした。

未亜によると、新井君達は「落ちた」んじゃなくて「落とされた」そうだった。

情報の出所が怪しい未亜なので、美奈子は頭から信じようとはしなかった。

『でさー』

「あのねえ」

『にや？』

「新井君は騎士なのよ？騎士！たかが10メートルちょっとの所からなんて余裕で地面に降りるに決まってるじゃない」

『それが違うんだなあ』

「はあ？」

『新井君達は、地面に「落ちた」んじゃないくて、「落とされた」っていったじゃん。新井君達、意識が戻らないからはつきりとしたことわかんないけどさ』

「でもねえ」

『それにね？警察の人もいつてたけど、正確にはあ、「落ちた」っていうより、「叩きつけられた」っていった方がいいんだって。騎士じゃなかったら即死してる位。だから、かえって先生達も首かしげてるんだって。どうして、どうやって、どこから二人が地面に落ちたのかって』

「どこからどこまで信じていいかわかんないけど - 」

『違うもんね！』

未亜はムキになって否定する。

『ちゃんと職員会議、盗聴してしいれた情報だもん！』

「あんたねえ！」

この夜、美奈子は、盗聴器仕掛けられてないか部屋中を調べた後で、ようやくベットに潜り込んだという。

- 同日 深夜 -

- 某所 -

- ??? ??? -

グチャ

ビチャ

鉄の匂いが充満する中、足下に転がるオトコの背広から財布を抜き取ろうとして、体に走る痛み顔に顔をゆがめた。

今日、新井達を殺し損ねたのは誤算だった。

あの新人生のせいだ。

体育の時、事故に見せかけてまず弟から殺そうとしたのに、それをアイツは邪魔をした。

否

邪魔どころではない。

逆襲さえしてきた。

あの時、私を吹き飛ばしたあの力。

絶対、アイツの仕業に違いない。

放課後、また、しかも、今度は兄弟で私を蹴りモノにしようとした新井達を殺し損ねたのも、あの攻撃を受けて力が足りなかったせいだ。

許せない。

新井達は絶対に殺す。

それがこの世界のルールだから。

私を汚した者は世界を汚した敵。

敵なら殺されるべき。

そうでなければならない。

私は手にしたカードケースを開き、目の前で食事中のペットに声をかける。

新井達を殺しに行くために。

「さあ - おいで」

この子は抵抗する人間の体を食いちぎるのが大好きなかわいい子。
内蔵の中でも生きた人間の肝臓は大好物。

このオジサンも、随分抵抗してくれたから楽しめたらう。

おじさんが肝臓を引きちぎられた時のあの光景は、私もかなり楽しめた。

名前くらい - 。あ。財布があつた。

へえ。

市の教育委員長なんだ。

エライのにね。

さ、次のご飯はちょっと物足りないかもしれないけど、食べてもらうわ。

「戻りなさい。^{ビースト}獣」

命令に従ってケースに戻る私のかわいいペット。

新井達の居場所はわかっている。

この子以外の子達にも新しいご飯をあげなくちゃ。

きびすを返す私の背後には、食いちぎられた内蔵をさらす、どこかのオヤジのなれの果てがあつた。

おじさん。この子のエサとお金、ありがとね。

壊れたココロ その3

市立病院

裏口に通じる通路に声が響く。

「あんたね。こんな夜中に非常識でしょ！患者さんだって迷惑だろつから、さ。帰った帰った！」

「ほら、須藤さん。コーヒー買ったらずぐ病室に戻ってくださいよ？」

夜勤の看護婦が、1階ロビーの自動販売機に入院患者を案内するため、すぐ近くにいたのも、やはり偶然だった。

グチャッ

という鈍い音を、彼女は聞き逃さなかった、ただそれだけ。

「？」

看護婦として、この病院の関係者として、今の異音は確かめておく必要がある。

「須藤さん、ここから離れないくださいね」

職務熱心な看護婦は、患者にそう言い残して、音がした方へ歩き出した。

角を曲がった先、音がしたあたりにさしかかって。

数秒後、病院中に、彼女の悲鳴が響き渡ったという。

1時間後のことだ。

裏口付近は警察により封鎖され、鑑識が何人も出入りを繰り返し

ていた。

「こりや、ひでえな」

死因を調べている医者 of 足下には、警備員の死体が横たわっている。

「- おい、ホトケのアタマは見つかったのか？」

「近辺、くまなく探させているのですが」

「どこの物好きの仕業だ？こいつは」

横たわる死体には、胸から上の部分がなかった。

ただ、警備員の制服を着ていることだけは確かだった。

まるで、生きていた時の自分の職業を主張するかのように-。

「第一発見者は？」

「精神科でケアの最中です」

「つたく、看護婦が医者 of 世話になつてりや、もう世話ねえなあ

……立川先生、こりや、ホトケは何に切断されたんですかね？」

「切断、というより、食いちぎられたという方が正しいな」

「人間をひとくちで？まさか！」

「何件か野犬に腕を食いちぎられた死体の切断面を見たことがあるが、数力所あるんだが、きれいに並んだ、何か硬くて太いものが食い込んだらしい痕なんか、こりや、歯っーか、牙のそれだよ。もうそっくりだ」

「そんな-」

「警部」

刑事が反論しようとした時、部下が声をかけてきた。

「隣のラブホテルで似たような事件が発生しました。それと」

「なんだ？」

「ヤバいっす。近衛が動きました。このヤマ、第三種事件として認定されましたね」

「くそ、あいつら」

部下の報告に、思わず刑事は顔をしかめた。

第三種事件 -。

殺人等、人間が犯した個人単位を犯罪者とする犯罪を第一種、大規模テロ等の無差別・大規模な、組織・国家を犯罪者とする事件を第二種、人間以外を犯罪者として認定せざるを得ない事件を第三種と、政府が独自に決定した事件のカテゴリーの一つだ。

第一種は警察、第二種は国家公安委員会、第三種は宮内省近衛府が操作の指揮権を持つ。

つまり、警部達はこの事件が第三種事件として認定された時点で、独自の捜査権限を失ったことになる。

警察官として面白いはずはない。

まして、あんな珍妙な連中なら -。

刑事達は近衛府の取り調べの間中、ずっとロビーでコーヒを飲みながら待つしか方法がなく、たばこも吸えずにいる様は、まるで自らの忍耐力の限界に挑戦しているようだった。

不意に近衛の封鎖が解除された。

声がする。

「わかりました。では、撤収です」

終わったようだ。

刑事達は一斉に現場に視線を向ける。

背の高い男に送り出されるようにして、一人の背の低いローブ姿の少女が出てきた。

フードを被っていないことに気づいてあわててそれを被ったため、一瞬しか顔がわからなかったが、若い刑事の一人には、その少女に見覚えがあった。

- あの子は確か。

そう。昨日、生徒二人の転落事故の聞き込みで行った明光学園でみかけた覚えがある。

たしか-。

思い出した。

水瀬とかいう子。

大好きな美少女ゲームの某キャラと同じ名字だから忘れるはずがない。

これはどういうこと？

「おい、村田、いくぞ」

上司に声をかけられた刑事 - 村田理沙^{むらた・りさ}は、慌てて上司の後に続いて現場に戻った。

3日後、不眠不休で事件を追っていた理沙は、上司の岩田に呼び出された。

「もう忘れる」

岩田から開口一番、そう言われた理沙は岩田に食ってかかった。

「どういうことですか、それ！？私じゃ、このヤマは解決できないってことですか！？」 「お前が精力的に事件を調査していることは俺も認める。だが、この事件はすでに俺たちの手を放れているんだ」

「事件は事件です。調べて犯人を逮捕することが我々の職責ではありませんか！」

捜査課の面々が一様に自分たちに注目していることに気づいた岩

田は、村田を連れて署の屋上に出た。

「ここだけの話だ。他言はするな」

暮れなずむ世界で、岩田は手すりにもたれかかるようにしてたばこに火をつけた。

「はい」

「病院とラブホテルでの死体の傷痕が一致した。同一の凶器によるものであることは明白だ」

「ならなおさら！」

「聞け」

いぶし銀の魅力満載の村田のような若手にとって迫力満載の岩田にじつとにらまれて村田は押し黙った。

カエルがへびににらまれたのに近い。

自然と脂汗が背筋を流れた。

「正確には、「歯形」が、だ。」

「歯形？」

「そうだ。そして、犠牲者こそでなかったものの、ラブホテルでの死体が、鑑識中に屍鬼化した。いいたいことはわかるな？」

屍鬼。簡単に言えば、生きる屍・ゾンビのことだ。頭部か心臓を完全に破壊しないと死ねない哀れな存在。

ある種の妖魔に殺された場合、高い確率でこうなるといわれている。

「犯人は人間ではないと？」

「そう考えている。それと、お前のいう明光学園の生徒についてだが、捜査は一切禁止、報告書等から覚え書きまで一切を破棄しろ。記憶からもだ。これは上からの絶対命令だ」

「なつ、そんな！なぜです？たかが生徒一人のことに、なぜ上か

「そんな命令が」

「いいか村田、俺たちのやってることは刑事ドラマじゃない。逆転大団団が常に期待できないことだ。それが、生きるってことだ。死んだら終わりの一発勝負だ。そのことを忘れるな」

たばこを踏み消すと、岩田はドアに向かって歩き出した。

「……深追いしない方がいいことだって、世の中にはあるんだ。いいな？」

岩田が自分のことを心配してくれていることはわかる。

だが、これは私の事件だ。なのに、なぜ？

私が女だから？

今まで男に負けないように頑張ってきた。だから今の地位があるのに！岩田警部は私を認めてくれてていないのか？

なら。

そうなら、

あまりにひどすぎる。

理沙は、やり場のない無念と悔しさに唇をかみしめながら上司の背中を目で追った。

口の中に血の味が広がった。

●市内 某書店

本屋に立ち寄った美奈子が恵美子と出会ったのは、ほんの偶然からだった。

本棚に並ぶ絵本を眺めていた美奈子が、同じように絵本を眺めて

いた彼女の肩に触れた。
そういうことだった。

「あ。ごめんなさい。」

「……」

恵美子は表情を変えずにじつと美奈子を見つめてくる。

「え、絵本、好きなんですか？」

「き、きらいじゃない」

「あの、イトコにあげようとおもってますけど、どんなのがいいと思いますか？」

「……これ」

ざっと見回した中から彼女がとりだしたのは、一冊の絵本。

黒い子猫が微笑む絵がなんだか和む、そんな絵本だった。

「どんなお話なんですか？」

「読めばわかるわよ？」

「あ、それはそうですね？」

まちかどの真っ暗な中で
黒い子猫が鳴いていました。

まわりの猫達は白い猫ばかり。

でも、この子猫だけは真っ黒でした。

ある日、白い子猫がやってきて黒い子猫にいました。

みんな白いのに、なんであなたは黒いの？

あなた、猫じゃないわ。

黒い子猫はいました。

でも、ぼくだって猫だよ？

白い子猫はいました。

ちがうわ。白くなくちゃ猫じゃないわ。

そう言われた黒い子猫はみんなから仲間はずれにされました。

誰も一緒に遊んでくれません。

どんなに話しかけてもお返事してくれません。

誰かとお話したい子猫は、みんなに挨拶することから頑張りました。

きっと、返事してもらえると信じて……。

おはようございます。

こんにちわ。

おやすみなさい。

晴れた日も、

雨の日も

風の日も

黒い子猫は頑張りました。

でも、

悲しいことに、誰も返事をしてくれません。

さみしくて悲しくて、黒い子猫は毎日泣いていました。

ある日のこと

あら？子猫ちゃん、どうしたの？

声がします。

見上げると、赤い服を着た女の子がこちらをみつめています。
さみしいの？

うん

じゃ、おいで。二人なら寂しくないよ。

黒い子猫は女の子に拾われました。

女の子はサーカスの踊り子でした。

黒い子猫は、女の子に踊りを教わりました。

タッタカタッ

タッタカタッ

上手に踊れると、女の子がうれしそうに笑ってくれます。

黒い子猫はうれしくて、起きてから寝るまでずっと踊りの練習です。

タッタカタッ

タッタカタッ

いつしか、黒い子猫の踊りは、みんなの話題になりました。

黒い子猫の踊りを見に行こう。

見に行こう。

みんながならんでサーカスをめざします。

白い猫

ブチの猫

灰色の猫

みんなです。

タッタカタッ

タッタカタッ

黒い子猫が踊ると、みんなが拍手です。

いいぞ！猫ちゃん！

白い猫達が叫びます。

キミこそ猫の中の猫だ！

黒い子猫は、白い猫達からやつと猫と認められました。
みなさんもサーカスが来たら、見てあげてください。

タッタカタッ

タッタカタッ

黒い子猫がうれしそうに踊っています。

タッタカタッ

タッタカタッ

「へえ。なんだかサクセスストーリーっていうか、シンデレラストーリーみたいなお話ですね」

「そう。どんな子でも、きっかけと努力で幸せになれるって、そんなメッセージが込められている」

「あ。私、そういうの好き」

「……私は嫌い」

仏頂面で、つぶやくように言った言葉を、美奈子は聞き逃さなかった。

「え？」

「メッセージは捉える人によって意味が違ってくるから、そのいところには、いい意味でわからせてあげて」

きびすを返すようにして、絵本売り場から出ようとする恵美子の背中に、美奈子は語りかけた。

「ココロは、持ちよう一つですよ？」

「？」

「ほら、病は気からっていうじゃないですか。それと同じで、せつかくのいいメッセージだってキラキライってたら、悪いメッセージになっちゃいますよ」

「……」

「絵本のこと詳しいみたいですし、もう少しお話しませんか？私、

桜井美奈子っています」

「つまり、この作品における「女の子」は「幸運」なのよ。幸運に出会った猫は、その庇護の元、幸せになるって図式なのね。単純だけど、子供にはむしろその単純さこそが――」絵本について熱弁を振るっていた恵美子は、美奈子がアゼンとした顔で自分を見ていることに気づいて、口を閉じた。

「何？」

「いつ、いえ。絵本にそこまで深い洞察が必要だって考えてなかったから……」

「そうね。でも、どんなものだってどんな解釈だって成り立つもの」

書店の隣の喫茶店。恵美子はダージリンで渴いたのを湿らせた。

「そういうものですか」

「この作品、私の誰か、大切な人が作ってくれたものだから」

「え？」

「小さい頃から私は孤立していた。友達作れなくて、ずっと。それを心配したその人が、私を励ます意味で作った絵本がこれ。あんまり売れなかったけどね」

「……いつか、きっかけと出会えば、幸せになれるってことですか」

「そうね……その人は、そういいたかったんだと思うわ」

喉に引っかかったような言い方が、美奈子は内心驚いていた。

美奈子と別れた帰り道、恵美子は絵本のセリフを思い出しながら歩いていた。

何度も何度も読んだ絵本。

泣いてばかりの私が、希望として、そして絶望した絵本。

ポケットからカードケースを取りだしてその冷たい感触に顔をゆがめる。

絵本の世界より、このカードケースの中身こそ、私の現実だから。
-

私という黒猫には、赤い女の子も、サーカスも現れてはくれなかった。

黒猫は無視されるどころか、いつしかいじめられていました。
そんな絵本の登場人物、それが私という黒猫 -。

まちかどの真っ暗な中で
黒い子猫が鳴いていました。

まわりの猫達は元気な猫ばかり。
でも、この子猫だけは根暗でした。

ある日、元気な子猫がやってきて暗い子猫にいいました。
みんな元気なのに、なんであなたは暗いの？
明るくなければ、猫じゃないわ。

暗い子猫はいいました。
でも、私だって猫だよ？
明るい子猫はいいました。

ちがうわ。明るくなくちゃ猫じゃないわ。
そう言われた暗い子猫は、ますますみんなから仲間はずれにされました。

誰も一緒に遊んでくれません。
どんなに話しかけても挨拶すらしてくれません。

誰かとお話したい子猫は、みんなに挨拶することから頑張りました。
た。

きつと、返事してもらえると信じてー。

おはようございます。

こんにちわ。

おやすみなさい。

晴れた日も、

雨の日も

風の日も

暗い子猫は頑張りました。

でも、

悲しいことに、誰も返事をしてくれません。

さみしくて悲しくて、暗い子猫は毎日泣いていました。

ある日のこと

あら？子猫ちゃん、どうしたの？

声がします。

見上げると、不良になった幼なじみのオス猫がこちらをみつめています。

さみしいの？

うん

じゃ、おいで。

ナグサミモノニシテアゲルヨー。

暗い子猫はオス猫に犯されました。

何度も、

何度もー。

オス猫は不良でした。

暗い子猫は、オス猫に、今まで以上の生き地獄があることを教わりました。

タッタカタッ

タッタカタッ

オス猫に従うと、地獄は少し和らぎます。

暗い子猫は怖くて、起きてから寝るまでずっといいなりです。

タッタカタッ

タッタカタッ

でも、

生き地獄の中で、暗い子猫は道具を手に入れました。

タッタカタッ

タッタカタッ

暗い子猫をいじめると、みんなが死にます。

いいぞ！猫ちゃん！

白い猫達が恐怖を叫びます。

キミは死に神だ！

暗い子猫は、白い猫達からやつと猫と認められました。

関わりと死ぬ恐ろしい存在として。

タッタカタッ

タッタカタッ

屍の上で、暗い子猫はうれしそうに踊っています。

タッタカタッ

タッタカタッ

壊れたココロ その4

「ねえ、博雅君」

「ん？」

「普通の人が走るスピードって、どれくらいかな」

放課後、本屋に行こうと誘われた水瀬が、不意に博雅にそう言った。

あきしの・ひろまな
秋篠博雅 -。

旧華族の出だが、騎士としての血を持つために明光学園に入学したという変わり種だ。

190センチの堂々とした体躯に、濃い顔が乗っている。

一言で言えば、「マジメといったらこんな顔」の典型的な顔立ちだ。外見だけじゃなく、内面もマジメ一筋。言い換えれば融通が利かない。

だから、こういう時は水瀬のような悪知恵の働く者からいいように利用されることになる。

「そりゃ、こんなもんじゃないのか？」

一般人が軽く走る程度で、博雅は走った。

軽く300キロを超える移動スピードを誇る騎士である博雅にとっては走ったうちには入らないが・・・。

「じゃ、そのまま走って」

水瀬も突然走り出している。

「ち、ちよっと、どういうことだ!？」

「そこへ!」

水瀬は、ビルとビルの中の細い路地を示し、博雅と一緒にそこへ飛び込んだ。

少し遅れて、誰かが水瀬達を追いかけるように路地に飛び込んだ者がいた。

しかし、いるはずの二人はどこにもいない。

まかれたか -

舌打ちした途端、息が出来なくなった。

気がつくと、骨が折れたかと思うほどの力で腕をねじ上げられ、壁に押しつけられているのに気づいた。

「ぐっ - かはっ」

「誰？」

さっきまでの、のんびりした水瀬の声ではない。凍てついた世界を思わずにはいられないほどの冷たい、恐怖感を固まりにしたような、そんな声だった。

声だけで、体が金縛りにかかったようになる。

「返答次第では - 殺す」

「!!」

「しゃべる？」

無言で何度も頷くと、不意に力が緩められ、地面に崩れ落ちた。

「……で？」

「お、おい水瀬」

殺気の余波を受けて金縛り状態だった博雅がようやく水瀬に声をかける。

「この人、知ってる？」

「知るか」

荒い呼吸を繰り返して何とか肺に空気を入れようとしているのは、スーツ姿の女性 - 。理沙だった。

「さ。しゃべって」

「け、警視庁警部補、村田理彩……」

意外な答えに、水瀬と博雅は、思わず顔を見合わせてしまった。

「で？どういことです」

あきれ顔の水瀬が、なんとか復活した理沙に問いかけた。

「僕、高校生ですよ？」

「……あなた、何者なの？」

「へ？」

「市立病院で近衛と一緒に行動しているのを見たわ。それに、あなたへの身辺調査は禁止されるし」

「……危ないコトしてるんですね。死にますよ？」

「ただの高校生相手にして、そんなことになる？絶対ヘンなのよ！」

「で、独断で僕の調査を？」

「あなたを調べる線でいけば、きっと犯人にたどり着く。私の力ンはそういつているの」

「お姉さん……熱血刑事ドラマみて警察に入ったクチでしょ」

「悪い！？」

図星を突かれた理沙は赤面しながら言い返した。

「悪くはないし、いいカンだと思うけど……」

水瀬は、不意に路地の奥を見つめると、博雅にいった。

「博雅君、この人を守って路地から出て」

「何？」

「来るよ」

グルルルッ

獰猛なうなり声を上げながら路地裏の物陰から飛び出してきたのは、漆黒の肌に炎のような瞳を持つ、牛ほどもある犬だった。

断っておくが、誇張ではない。

北海道の牧場生まれの理沙がそう認めるサイズだから間違いない。一言で言つて、ありえる大きさではない。

しいて名前を付けるとしたら、「牛犬」だ。

グオオオッ！

「牛犬」は、あたりを震撼させるほどの吠え声を響かせ、その巨体で10メートル以上の距離を、ほぼ一駆けで詰める、騎士なみの動きを見せた。

「水瀬！」

その巨大な顎で水瀬を砕こうとしているのは、博雅の目からも明らかだった。

博雅は一瞬、水瀬の小柄な体が砕かれる光景を想像して戦慄した。

「せえのー」

対する水瀬は、バックに入れた手を無造作に振り下ろしたただけ。たった、それだけの動きでー。

ズバンッ

肉が砕ける音が響いた途端、「牛犬」は真つ二つになって理沙の目の前で消滅した。

水瀬の無造作の一撃によるものだった。

「久々だなあ。こういうの」

水瀬は、どこか楽しげに振り下ろした手に握っている物をバックにしまいなおした。

魔法騎士専用の刀 - 霊刃だった。

霊刃 -。

別名サイコブレードともいう。魔法騎士の魔力で作られた刃を持つ刀の総称。

破壊力は鋼鉄製の刀剣の比ではないが、魔力を消耗するため、長時間の使用には向いていなかったり、魔法騎士以外には扱えないなどの制限が強い。

「お、おい、今の、一体、何だ？」

騎士である博雅にとって、驚いたのはそこではない。

無造作な一撃で牛ほどもある巨体を真つ二つにしてのけた水瀬のデタラメなまでの強さの方だ。

「妖魔だよ。低レベルだけどね」

「あんなものがどうしてこんなところに！」

「誰かに召還されたのかな？ - わっ」

理沙が、不意に水瀬の腕をねじ上げ、突然手錠をかけた。

「ち、ちよつと！」

「銃刀法違反の現行犯で逮捕します！逮捕時刻16時35分！さ、これ以上のことは取り調べ室で聞いてあげるわ！今までの件も含めてね！」

理沙の目がランランとアブなく光っている。

「……カツ井、でる？」

誤認逮捕

職権濫用

捜査範囲の著しい逸脱

命令違反

その他、公に出来ない理由で、理沙に下されたのは3ヶ月の減棒処分。

ちなみに、霊刃が銃刀法の適用から除外されていることを理沙が知ったのは、部長に延々怒鳴られている最中だったという。

「あれ？これって……」

あの「牛犬」の一件の後、現場に戻った水瀬は、脇道に積み上げられたゴミ袋の影で、一冊の手帳を拾った。

水瀬がよく見知った手帳。

明光学園の生徒手帳だ。

「沼田、恵美子……」

翌日、明光学園。

水瀬は、情報通の未亜の元を訪れていた。

丁度、中庭で昼食を取り終わった未亜の横に水瀬が座った状態で、二人は会話を交わしていた。

「沼田先輩のこと？」

「うん。知ってる限りでいいんだけどね。どんな人かなって」

「あー。まあ、元からあんなんじゃないかなかったんだけどねえ」

抜けるように青い空を仰ぐと、未亜は深くため息をついた。

いろいろウワサがあるらしいから、未亜なら一発でノッてくると思っていた水瀬は、予想外の反応に、内心で驚いていた。

「というと？」

「沼田先輩って、私と美奈子ちゃんと中学一緒なんだ。で、入学したての頃はいろいろよくしてもらったから、よく覚えてるけどね。」

あの頃は明るくて優しい人だったんだよ？今じゃ、想像できないかもしれないけどさ。……ふう……やっぱり、あの件だよねえ」

「あの件？」

「お母さんの自殺」

「自殺？」

「沼田先輩のお母さんって絵本作家だったんだ。結構有名でさ。自殺した時は、話題になったんだよ？」

「自殺の理由は？」

未亜は首を横に振った。

「作家とか芸術家って、ワケわかんない理由で自殺とか人殺しとかするから」

「それと、沼田先輩の変化とどういう関係が？」

「第一発見者が沼田先輩。しかも、自殺の前の晩、先輩とお母さん、かなり口論になっていたらしくてね。先輩、自分が自殺に追い込んだって思いこんでるんだ。一種の対人恐怖症だね。自分は何気なく言っただつたもりの言葉が、大切な相手を簡単に殺してしまうって」

「で、友達とも言葉を交わさなくなった」

「うん……」

体育座りの未亜は、膝に顔を埋めるようにして深く息を吐いた。

「私達とまでね」

「……」

「そんなんだから、最初は親身になってくれた友達まで離れていった。こっちに進学してからは、もう最悪。イジメられるようになってさ……」

可哀想だよねえ。

そう、ポツリとつぶやく未亜。

「でもさ。誰一人っていうワケじゃないでしょ？せめて一人くらい」

「いるわよ。私と美奈子ちゃん、心の中だけだったら他にも何人もいる。それに」

「それに？」

「多分、一番は、この前入院した新井君のお兄さんの圭一さん。家、近所だから私にとっても幼なじみでさ。仲良かったんだ。ただね」

「うん」続きを促す水瀬。

「圭一さん、あんまり素行が良くないんだ。乱暴でさ。あっちこっちに敵がいて」

「草薙君みたいな人かな」

「そっくりだね。で、敵としては、先輩は圭一さんの彼女。当然、敵。自分と全然関係ないところで、先輩、敵を作りまくっていたんだよね」

市内某ディスカウントストア店内

『タイムセール！大特価！カップラーメン12個入り1箱1000円ぽつきり！』

というPOPを前に、スーツ姿の女が思案を重ねていた。理沙だ。

給料日まであと6日。一日2個で何とかしのげる。だからこそ、ここでの選択は大切だ。

醤油味が味噌味が-。

シンプルでさっぱりをとるか。

濃厚なこってりをとるか。

理沙はこの問題にとりかかってすでに30分以上、山積みになれた箱の前で思案を重ねていた。

おかげで他の客がカップラーメンを買うことが出来ずにいるものの、店員ですら声をかけるのをためらう程、理沙は思い詰めていた。

よし

シンプルな醤油味！シンプルだからこそ、飽きが来るのは遅いはずだ。

アパート中を引っかき回してようやく手にしたしわくちやの1000円札を握りしめると、理沙は箱に手を伸ばした。

つんつん

誰かが突然、理沙のお尻をつついたのは、丁度、その時だった。

「きやああああっ！」

理沙の悲鳴が店内に響き渡り、店内に居合わせた全員が、理沙に注目しているのがわかった。

「だっ、誰よ！」

怒りに任せて振り返った理沙の視界に入っただのは、両手で耳を塞ぎながら、びつくり状態で凍り付いている水瀬だった。

「あっ、あんた……」

そう。理沙の減棒の原因がここにいた。

「なっ、何よ！私が減棒処分になったのが、そんなに面白い！？おかげで給料日までラーメンするしかないのがそんなにおかしい！？それとも、バカにするだけじゃ気が済まなくて、今度はセクハラしに来たつての！？」

ふるふる

無言で首を横に振る水瀬。

「お願いに来たの」

「はあ！？」

「捜査してほしいことが。」

「なによそれ！警察動かすなら、近衛経由でやればいいじゃない！」

「それ、手続きすつごく面倒だからヤダ」

「ああそう。でも、私の答えなら最初から。」

「ラーメン、3箱買ってあげる」

「イエスよ」

近くの公園に移動した水瀬は、理沙に缶コーヒーを手渡しながら言った。

「事情聴取してほしい人がいるんだ」

「あ、の、ね、え」

これだから素人は。

あきれ顔の理沙は、諭すように言った。

「キミ、考えてみなさい。キミを思いつきだけで警察が取調室に連れて行ってくつていわれたら、キミは黙って連れて行かれるの？あのね？警察が人一人、取り調べるのにどれだけ手間がかかるかわかってないわね」

「学校の生徒落下事故、お姉さんが調べてるんでしょ？」

「それが？」

「お姉さん。あの妖魔がらみの事件、調べたくない？」

じつと目を見ながら語りかけてくる水瀬に、思わず理沙は視線をそらせながら答えた。

「そりゃ、調べたいわ」

「じゃ、事情聴取してくれたら、調べられる」

「え？」

思わず、水瀬を見返す理沙。

「この二件は繋がっているから」

「ま、まさか」

「最初から否定して、そこから何が進むの？それに、学校絡みの

事件ってことなら、管轄からいっても、お姉さんは天下御免で捜査
ができるはずだよ。」

壊れたココロ その5

夕焼けに染まる公園で、恵美子がまた泣いている。

恵美子のスカートをめくったヤツは俺がやつつけてやったから、泣くな。

つか、スカートめくられた程度で泣くなよなあ。

- オマエは、俺が守ってやる。だから、泣くな。

何度、恵美子にこう言っただろう。

- 本当？

不安げな表情で、俺を見つめる恵美子。

- ああ。何しろオマエは -

あの頃、俺は恵美子に何て言っていたんだろう。

そして -。

あの頃から俺は、恵美子を守っていたといえるんだろうか。

子供同士で交わした約束を、俺は果たしたのだろうか。

・オマエは、俺が守る。

俺は、本当に……。

新井圭一の事情聴取テープより（一部抜粋）

採取日 4月○○日

時刻 14時25分～15時15分

対象 新井圭一（私立明光学園2年在学中。騎士）

採取者 村田理沙警部補

同席者 記録削除。

問い：現場に居合わせたのは誰か？

答え：新井圭一（以下、俺と記す）と新井圭次（以下、弟と記す）、それと沼田恵美子。

問い：現場に居合わせた理由は？

答え：弟に、恵美子に挨拶くらいしろって呼び出した。

そしたら、圭次のヤツ、ブチ切れてさ。恵美子をののしるんだよ。

なんで俺がオマエみたいなヤツに一々挨拶しなけりやなんねえんだって。最初はさ。俺も兄貴だからさ。たしなめる程度だったんだけど、あのヤロウ、恵美子をダッチワイフだの公衆便所だのいいだした時は俺もキレたよ。……まあ、あいつをぶん殴ろうとした所まで覚えてるけど、目が覚めたら俺はここ。圭次は集中治療室ってわけさ。

だから、誰の仕業かなんて、俺に聞いてもわかんねえよ。

問い：沼田恵美子とはどういう関係か？

答え：幼なじみさ。小さい頃からずっと一緒だった。

問い：調べさせてもらったが、あまりいい噂を聞かない。心当たりは？

答え：あいつが「暗い」とかいうヤツだろ？違う。あいつは単に不器用なだけだ。人を傷つけるのが怖くて、人と接するのを嫌がっているだけなんだ。それでも、あいつは本当は優しい子だ。誰も面倒見ない学校の花の世話をしたり、近所のノラ猫にエサをやったり。いろいろいいこともしている。

問い：周囲が誤解しているだけと？

答え：そうだ。あいつが自分の殻に閉じこもるのをやめて、普通にやっついていれば、あんな風にはならなかった。

問い：イジメの主導的役割を果たしたのは、あなたと対立していたグループに所属していた女子生徒達だったと聞いているが？

答え：鈴木達だろ？あいつら、死んでせいせいしたぜ。あんな死に方するってのは、ちよつと後味悪かったけどな。刑事さんも知ってるだろ？喫茶店に無人のタンクローリーが突っ込んだ事件。鈴木達、あれで死んだんだ。

恵美子にちよつかい出しているって聞いた時はブチ切れてケンカも

したさ。

だけど、アイツらが悪いんだからな。

問い：あなたのそういう素行が事態をややこしくしたとは思わないか？

答え：（しばらく沈黙）そりゃ、そうかもしれないけどさ。俺は恵美子を守るためにやったんだ！誰も、俺以外の誰からも守ってもらえないんだから、仕方ないじゃないか！
それにあいつは -

問い：あいつは？

答え：刑事さん。これ、プライベートだから、黙っていてくれる？
いい？じゃ、話す。

恵美子は、俺の恋人だ。この前のバレンタインの時、そういう関係になった。

あいつ、手作りのチョコもってきてくれてさ。俺、ホント、心底うれしくて。はあ、うまかったよなあ。アレ。

……刑事さん、そういうの縁なさそうだから、わかんないか。

ち、ちよつと刑事さん！俺は病人だぜ！？胸ぐら掴むなんて。

……はい。わかりました。ごめんなさい。ちよつとノ口けただけです。口の中に銃を突っ込むのやめてください。

はあ。刑事さん、案外冗談わかんないんだから。はい。ごめんなさい。マジメに答えます。

問い：で、バレンタインの時に一線を越えたと？

答え：ああ。でも、俺は後悔していない。きつと恵美子だって。

問：まさかと思うが、力づくだったわけではないな？

答：そりゃ、俺が……まあ、少し強引だったかもしれない。恵美子、ベットまですんなり付いてきたのに、服を脱がせるってなったから、「ごめんなさい！」だぜ？

我慢できるかっての。

「今日はダメ」とか「終わったら」とか、なんかマジ焦っていたけどさ。

……え？「女の子の事情」？

なんだそれ？

…「お赤飯の日」？

知るかそんなもの。

刑事さん。ここ、病院だぜ？発砲はやめてくれ。ついでに俺は病人だ。

ま、とにかく、恵美子は俺のモノになったんだ。俺は責任はとるつもりだし。言っただろ？お互いに後悔してないって。あいつ、あの後だって拒まないし。

抵抗しても無駄だっけ諦めてるだけじゃないかって？

そんなわけあるかよ！

恵美子は俺のモノだ！俺がどうしようとか、俺の勝手だし、アイツだって俺の気持ちと同じはずだ！

……え？

い、いや……それは……。

（長い沈黙）

だってさ、あいつ、いつもイジめられてばかりだったから、それは-。

ち、ちょっと待てよ刑事さん！今、今、思い出すからさ！

ま、待てって！待ってくれよ！

絶対、絶対あるはずなんだ！だから待てって！

- 採取者、退席。

録音終了

翌日夕方

市内某喫茶店

「キミ、結構策士ね」

「そうですか？」

喫茶店の一角で、理沙と向かい合っるのは水瀬だった。

理沙の目の前にはスパゲティやハンバーグなどの食べ終わった皿が山積みになっていた。

対する水瀬の前にはアイスティと書類があるだけ。

「そうよ。で、はつきり教えて。沼田恵美子がホシっていう根拠は？」

「これ」

書類から目を離さず、ポンツとテーブルに置いたのは、あの現場

で拾った恵美子の生徒手帳だった。

「あの一件の現場で拾った。新井君達の不可思議な落下事故の時に居合わせて、ラブホテルでの屍鬼事件の監視カメラに収まっていた、あの犬の一件で物的証拠を残している」

びつくりした表情の理沙と平静なままの水瀬。

「……疑うには十分すぎるわね。キミが言っていた、事件と事件のつながりがこれではつきりしたわ……でも」

「？」

「警察の調査は、すべて近衛には筒抜けってコト？」

「その質問には答えない。それと、手帳、悪いけど、鑑識に回したりしないだね？ここで警察が大きく動くのはまずいもん」

「……わかったわ」

ハンカチにくるんでポケットに収める理沙の目の前にナポリタンが運ばれてきた。

「まだ食べるの？」

「こういう時じゃなくちゃ、食べられないじゃない？」

じつと水瀬を見据える理沙は念を押すように言った。

「キミの奢りなんだからね？」

「はいはい」

・年下のしかも高校生に食事をおごらせることにちょっとは罪悪感を感じる。それでも公僕か。と、思わないでもないが、水瀬はあえて黙っていた。

おかわりのスパゲティに、文字通り食らいつく理沙は、ちらりと書類に目をやった。

「それフガフガブカ」

「お姉さん。食べるかしやべるかどっちかにして」

「モグモグ、ゴクンツ」最後の質問。あれ、かなり響いていたわよ」

「ま、彼自身も罪悪感を感じていたってことだよな」

「でも、結局、思い出せなかった。当然よ。そんなことなかった

んだものね。あのエロガキにはいい薬だわ」

質問は、変装した水瀬より発せられていた。

その質問に、新井は、大切な何かを見失っている自分に気づかされることになった

守るべきモノを-。

果たすべき約束を-。

質問への答えは

否

問い：「彼女を犯した後、キミは心から笑う彼女を見たことがあるか？」

同じ頃のことだ。

「うつゝくつゝ」

恵美子は、ベットの中で苦痛にあえいでいた。歯を食いしばって痛みがすぎるのをただ待つだけ。今の恵美子に出来るのはそれだけだ。

『よいか？召還獣が撃破されると、召還獣が受けたダメージの何割かは確実に召還者に跳ね返ってくる。使い方には十分に注意しろ』カードケースを手渡したあの店員の言葉が、今の恵美子には重かった。

「ぐっ！」

体を引き裂かんばかりの痛みに歯を食いしばって耐えるのはがこれで何度目か、恵美子は数えるのをとくに止めている。

「はぁ。はぁ」

カーテンの隙間から光が漏れる。

もう、昼間のはずだ。

学校には3日も行っていない。

だけど、誰も気にする人なんているはずもない。学校からすら、何の連絡もこない。

私が、誰からも必要とされていないからだ。

不要人間。

それが私。

そんな私がやっと手に入れた剣を傷つけたアイツは、新井と共に殺さねばならない。

憎い。

にくい！

ニクイ！！

殺す。

クロス！

クロス！！

コロシテヤル

コロシテヤル

コロシテ

コロ -

コ -

コ

……

……

痛みがそのまま憎悪へと変わり、苦しみが殺意へと変わるのに、時間は関係なかった。

それが、今や恵美子にとって快樂ですらあったから。

そして、破滅的な変化が、恵美子の精神を襲った。

クッ

クックック

クックックッ

アハッ

アハハハハハハッ

うつぶせになって痛みに耐えていた恵美子の口から、不意に笑い声が漏れた途端、それは腹の底からの大爆笑となって部屋中に響き渡った。

狂気としか思えない笑い声をあげながら、痛みと苦しみという名の快楽に酔いしれる恵美子の虚ろな目は、すでに正気の光を失っていた。

カタカタカタ -

サイドテーブルの上では、あのカードケースが、まるで恵美子の笑い声に呼応するかのように楽しげに揺れている。

まるで、狂気に浸食された恵美子の精神を歓迎するかのように -。

ザアッ -

突然の夕立に、理沙は裏通りに面した古ぼけた店先へ飛び込んだ。

まいったな。

どんよりとした雨雲を眺めながら理沙は肩をすくめた。

ついていない。

水瀬クンからは、単独での被疑者への接触が禁止されちゃうし。手がかりになりそうなお店を探していたら、雨に祟られちゃうし……。

理沙が、水瀬から受け取った恵美子の生徒手帳にはさんであった一枚の覚え書きを見つけたのは、全くの偶然だった。

「天乃原骨董品店」

簡単な地図と共にそう書かれたメモ一枚。ただ、それだけだが、警察で生きてきた理沙には、ひっかかるモノがあった。

問題は、理沙が地図のあたりを2時間かけて歩き回ったのに、該当する店が見あたらないこと。

地図の場所は、ここだ。

1時間前を通り過ぎたとき、ここは大きなビルの一部、たんなる壁でしかなかった。

そして、周囲を構成する商店街の店主も、所轄の交番勤務の警官すら、誰もこの店を知らないなんて、そんなバカな。

『いやあ。戦前からここに店を出しているけど、そんな店、知らないねえ』

『この交番での勤務は長いですが、自分はそんな名前の店は知りません』

どういうことだろう。

本当に架空の店なのか？

沼田恵美子は、どういう理由でこの覚え書きを記したのだろう。
こんな壁しかない所に――。

理沙の思考がそこまでいって凍り付いた。

壁？

そうよ。だって1時間前にもここに来たでしょ？

ほら。向かいは古本屋、その隣が床屋で……。

でも、私は確かに、雨宿りにと、この古ぼけた店の軒先に飛び込んだ。

壁――じゃなくて？

恐る恐る背後を振りかえる理沙。

そこは壁ではなく、古ぼけた店先。

店同様、古ぼけた人形や時計、様々な物が雑多にショーウィンドーに置かれている。

「……うそ」

色あせたフランス人形と目があった理沙は、ガラス張りのドアに古めかしい字体で書かれた店名を見て、言葉を失った。

「天乃原骨董品店」

理沙は、ドアを開けた。

あちこちに置かれたランプの光に照らされた店内は、びっくりするほど薄暗く、埃とカビ臭い空気が充満している。

そして天井から床まで、理沙にはガラクタとしか思えない物で埋

め尽くされているため、どこが通路かすら判然としない。多分、床が見える所が、いわば通路なんだろうけど、消防法の規制にひっかかっているとしたか考えられないほど狭い。

理沙は、ちらかった自分の部屋を歩く感覚で店の奥に入っていた。

「ごめんください」

返事はない。

「警察です。どなたかいらっしやいませんか？」

理沙は、胸のホルスターに収まった拳銃の安全装置を無意識に解除した。

「あのお」

「なんじゃ。客か？」

棚の影から突然現れたのは、年の頃でいえば12歳位の女の子だった。

腰まで伸ばした髪。整いすぎて、むしろ人形みたいな印象。ガラス玉のような瞳。

ゴシック調のワンピース。すべてが、この不可思議な、人間の気配がしない店に不思議ととけ込んでいた。

「あつ。あの、警察の者ですが」

理沙は、まるでこの店の空気と会話しているような違和感に戸惑いを感じながら声をかけた。

「警察？あれか？人間界で悪い者を捕まえるという、あれか？」
不思議なことをいってジロジロと理沙を見つめる女の子。

「ま、まあ、そう。お店の方、いらっしやる？」

「妾が、そうじゃ」

女の子は、平らな胸を精一杯そらせて、そういった。

この時理沙は、この店が家族経営で、この子は店番程度にしか考えていなかった。

「お嬢ちゃん。お店に出ていること多いの？」

「当たり前じゃ。ここは妾の店じゃぞ？」

「そう。あのね？」

理沙はハンドバックから一枚の写真を撮りだして女の子に渡した。
沼田恵美子の写真だ。

「この写真の人、この店に来たことないかな？」

「おお。召還箱を買ってくれた子ではないか」

「知っているの!？」

「当たり前じゃ。久々の、確か半年ぶりの客じゃったからな」
自信満々で言うことが。それ。と、理沙は心の中だけでつつこん
でおいた。

「あの娘が買ったもの？」

怪訝そうな顔で理沙を見つめる女の子。

「そう」

「……知ってどうする？」

「知ってから考えることにするわ」

「ふむ……」

しばらく考えたあと、女の子は言った。

「よかるう。あれは一つしかないものじゃから、似たモノで説明しよう」

ゴソゴソとそこら中を引っかき回し――。

ゴトン

ガラガラガランッ

「にぎやあああつー!」

ドッシャーンッ

棚から崩れ落ちてきたガラクタに生き埋めにされる女の子。

店内が舞い散るホコリで充満する。

「ゲッゲホゲホッ!ち、ちよつと!ゲホッ。だ、大丈夫!？」

「な、なんのこれしき」

涙目になった女の子は、大きなタンコブをさすりさすりガラクタの山からはい出てきた。

「掃除、したほうがいいわよ?」

「や、やってはいるんだが……。お、あった」

ガラクタの中に目指す物があつたらしい。

女の子はホコリを払うと、理沙を誘ってカウンターらしき所にそれを置いた。

後頭部に蜘蛛の巣がべったり張り付いていたが、理沙は黙っていることにした。

「あの娘が買ってくれたのは、これのお仲間じゃ」

カウンターに乗せられたのは、何の変哲もない古ぼけた革製の名刺入れだった。

「これは?」

「お主、召還獣を知っているか?」

「いいえ」

「お主、バカらしいの」

「なっ！」

「召還獣は、魔法によって妖魔界から招くことができる低級な妖魔にもなれない、一種の精霊もどきのことじゃ。人間界では式神というらしいがの。きちんとした手順さえ踏めば、そこその魔法の力でも召還は可能じゃ。しかも、召還した者の命令には絶対服従じゃから、使役することができれば、かなりのコトが出来る。これは、その召還獣を最初から封印してあつてな、必要なときに必要な獣を解放、または封印することが出来る呪具じゃ。ま、あの娘に売ったのは、失敗作じゃが、こっちは完璧な代物じゃ。どうじゃ？」

「召還獣……」

理沙は、路地裏で襲われた「牛犬」を思い浮かべて戦慄した。

「そうじゃ。あの娘の箱には、たしか数百体はいたぞ？」

「そんな物騒な物を平気な顔で売っているなんて！」

「物騒？」

「だって。妖魔を売り買いしてるのと同じじゃない！」

「召還獣は、妖魔と違い「自我」がない」

女の子は理沙の言葉を遮るように言った。

「物騒かどうかは、獣を使う者の心一つだ。モノに罪はない」

「でも」

「この店は、モノを売る所じゃ。売り手のココロをどうこうする所ではないわ！」

突っぱねるように言い切る女の子に、理沙は反論することができなかった。

例えば、刃物を売ることそのものは悪ではない。これは確かだ。

例え、それが通り魔事件の凶器につかわれたとしてもだ。

通り魔を悪と呼ぶ者はあっても、刃物まで悪と呼ぶ者がいないのと同じだ。

少なくとも、理沙はそう思った。

「まあ。そういう意味では、後味の悪い取引ではあったな」

深いため息と共に、女の子がぼりつとつぶやいた言葉を、理沙は聞き逃さなかった。

「それ、どういうこと？」

「言つたろう？失敗作じゃったと」

「失敗作？」

「ああ。普通、こんなモノは、使用に際して代償は必要とされない。当たり前じゃ。いつ、何時、どれほどの規模で使用するかわからない以上、一々代償を求められてはたまつたものではないから」

「で、その、代償つて何なの？」

「記憶じゃ」

「記憶？」

「召還者は、召還する獣の強さに応じて、記憶を失うことになる。弱ければ、例えば昨日、何を食べたか忘れる程度で済む。しかし、下手をすれば全ての記憶を失うことになる。自分の名前どころか、自分が何者なのかすら。完全にな」

「それを、沼田恵美子は買った」

「そうじゃ。じゃがな」

女の子は、ガラクタの中から椅子をひっぱりだして腰を下ろした。

「あの娘は、それでいい。そう言っていたぞ？」

「え？」

『よいのか？記憶を失えば、それこそお主は自我を持たぬ人形になつてしまふぞ？』

『人形？』

『そうじゃ。過去を失い、自らが何者なのかもわからず、ただ呆

けるだけの、生きた人形じゃ。生きているとはいえん。過去があるからこそ、未来はある。過去がない者に未来はない。過去を失うことは、お主が考えているよりずっと辛いコトじゃ」

「……」

『考え直せ。他のモノにするのじゃ。値段は相談に乗る』

『これでいいのよ』

『ばかな！ココロが壊れた人形になるのじゃぞ！？壊れた生き人形なぞ、誰からも相手にされぬ！そうなくてもよいというのか！？』

『いいわ』

『……』

『失って、怖い記憶も、ほしい未来も、私にはないもの』

「何でそれで止めなかったのよ！」

理沙は激昂して女の子を怒鳴りつけた。

「手にした後、彼女が何をして、結果としてどうなるか、そんなこと、分かり切っていたことでしょう！？」

「だとしたらどうする」

「どうするったって……」

「あの娘は自分で判断し、自分で決めた。妾は一応は止めはしたぞ？」

「でも」

「でももへちまもないわ！」

女の子はガラクタを殴りつけながら怒鳴った。

「もう一度いうぞ！？あの娘は、自分で決めたのじゃ！他人がとやかくいうことか！？あの娘とて赤子ではない！自分のケツくらい、自分で拭くだろぅよ！」

しばらくにらみ合う二人。

「あなたは、それで満足なの？」

理沙は不意に、哀れみに満ちた声で、女の子に語りかけた。

「？」

「お金を出して買っていたあなたのお客様が、その商品で人を傷つけ、お客様自身まで傷つくことになるのよ？あなたに商人としてのプライドがあるなら。それはどういうことかわかるはずよ？」

「……この店には、一つのルールがある」

女の子は、ポツリとそう言い返してきた。

「購入に際して、客の決定があつた場合、それを拒否することは出来ない」

「ルールなんて無視すべきだったのよ！」

「妾には、それが出来ない。そう決められているのじゃ……」

悲しそうにうつむいて、女の子は言った。

「妾も、ある意味、人形じゃからな……」

「人形？」

「……機会があればまた来るがいいわ！買わぬなら出て行け！」

女の子がそう言い放った途端、突然、店内を突風が吹き荒れた。

「……！」

思わず目をつむる理沙。

風を感じなくなり、理沙は再び目を開けて、呆然とした。

「……え？」

ビルの壁の前にポツリとたたずむ自分の姿に気づいたからだ。

店が、消えていた。

手に入らないからこそ、欲しい。

そう思うもの。

どんな代償を支払ったとしても、惜しいとすら思わない、そんなもの。

誰もが、心の中で持ち続けていること。

泣いても、叫いても、手に入らないのに、それでもなお、人はそれを欲する。

何故？

単なる欲望？

今への不満の現れ？

それとも、後悔の裏返し？

それは誰にもわからない。

でも、人は求める。

「時よ。戻れ。」と。

読日新聞。月20日朝刊より抜粋。

『。市内で第三種事件。警察官2名重傷

午前1時頃、屍鬼が現れたという通報を受け駆けつけた警察官2名が屍鬼に襲われて重傷を負った。場所は。市の繁華街に近いラブホテル街の一角で、屍鬼は付近をさまよっている所を発見されたもの。この後駆けつけた警視庁騎士警備部により退治されたが、この騒ぎで周囲は一時、騒然となった。屍鬼化したのは、。警察署少年課勤務の丸木義男巡查長と見られるが、詳細を警察が確認中である』

「呪具、ね」

理沙から一部始終を聞いた水瀬だったが、まるで何でもないという顔で、話を聞き流しているようだった。

「って、ちよつとは驚きなさいよ!」

理沙がドンツとテーブルを叩くと、山積みになった皿が跳ね上がって音を立てた。

「警官が高校生にゴハンおごらせていることに驚いている」

「誰のせいで私が減棒になったと思ってるのよ!」

「自分のせい」

「つとに、顔に似合わずかわいくないんだから。あ、コーヒーおかわり。あと、ハンバーグセット、ライス大盛りで」

頬を膨らませてそっぽをむく理沙だが、食欲だけは非常に前向きだった。

「で、新井君達は?」

「お兄さんが今日、退院したわ。弟さんは」

「危ないの?」

「意識が戻らないって。昏睡状態で1週間よ？」

「ふうん……兄は退院。弟は未だ死にかけ状態……」

顎に手をやって考え込む水瀬が、思い出したように理沙にたずねた。

「お兄さんが退院したことは、沼田先輩は知ってるの？」

「問題はそこ」

ハンバーグが突き刺さったフォークで水瀬を指す理沙。

「お姉さん。お行儀悪い」

「彼女、行方不明よ」

「行方不明？」

「ええ。一昨日から家に戻った様子がないのよ。どこかで潜伏しているのね」

「警察の動きは？」

「失踪届も出ていないのに、捜査できないわよ。ノートタッチ同然。それだけでなく、昨日は屍鬼の件で警官2人重傷で大騒ぎだったんだから」

「あ、あの件？ - あれ？」

きょとんとした水瀬は、そのまま固まった。

「水瀬くん？」

まるで凍り付いたように動かない水瀬。

「おい」

手を振っても気づかない様子の水瀬をフォークで突つつく理沙。

「こら」

デコピン喰らわそうとした途端、

「居場所わかった」

と、水瀬がポツリと呟くように言った。

「へ？」

「あのラブホテル街のどこか」

「沼田恵美子が、ラブホテル街に潜んでいるってこと？」

「あのナントカいう警官、少年課で何してたの？」

「たしか、ラブホテル街近辺で売春行為に走る女の子達がいなか監視……って」

「沼田先輩、見つかったんだよ。その人に」

「で……丸木巡査長は」

「呪具のエジキ」

「……水瀬クン。もう、警察は警察で動くわよ」

理沙は真剣な顔で言った。

理沙達警察官にとって、同じ所轄の警官は家族同然の存在である。

それが、自分の迫う犯人に殺されたのだ。

警察官として黙っているわけにはいかない。

それが、警察官の仁義というものだ。

理沙は、その考えを疑ったことすらない。

「仇はとるわ！」

理沙の頭の中で太。にほえるのテーマソングがフルオーケストラで鳴り響き、その目が燃えるのを、水瀬はため息混じりで見つめていた。

「身内殺されて、指をくわえて見ているワケには……」

「ダメ」

対する水瀬は冷酷なまでにあっさりと言い返した。

「なっ！」

怒りに任せて席を立ち、にらみつけてくる理沙を、水瀬は冷やかに見つめ返した。

「逮捕するつもり？誰を？」

「沼田恵美子に決まってー！」

「何の容疑で？殺人？」

「あたりまえでしょう！何を言ってるの！？」

「凶器は？」

「だっ、だからー」

そこまで言われて、理沙は言葉を失った。

一般にありえない「呪具」などというもので連続殺人をしていたと報告して、上層部を納得させる自信は、理沙にはなかったからだ。

「そういうこと。その呪具の力を、どうやって証明してのけるの？呪具の力を、裁判所で証明してのける自信がお姉さんにはあるの？」

じつとつと理沙を見つめながら、諭すように語りかける水瀬の言葉が、理沙には重かった。

「ないよね」

「で、でも」

でも、それでは――。

殉職した同僚の無念は、一体、誰が、どうやって――。

唇をかみしめる理沙に、水瀬は続けた。

「気持ちがわからないんじゃないよ？でもね。こういう立証できない事件だからこそ第三種事件でしょ？お姉さんが暴走して沼田先輩を逮捕しても、敵討ちになんか絶対にならない。お姉さん。もう少し冷静になった方がいい」

「……」

「人生は一発勝負だよ？やり直しはきかないんだから、もう少し慎重な位にならないと」

理沙は、あの夕日の下で岩田から受けた警告を思い出して息をのんだ。

『いいか村田、俺たちのやってることは刑事ドラマじゃない。逆転大団団が常に期待できないことだ。それが、生きるってことだ。死んだら終わりの一発勝負だ。そのことを忘れるな』

「そうね……」

岩田さんに言われた言葉を、こんな子供にかけられるなんて、私としたことが――。

笑っちゃうわね――。

「じゃ、警察はどうしたらいいと思う？」

「取りあえず、新井兄弟に監視をつけて。沼田先輩はまだ諦めたわけじゃない。必ず来るよ」

「いつ頃？」

「多分、今夜」

「早くない？」

「っていうか、今夜中に決着つけないと」

水瀬は追加注文をとろうとする理沙を止めながら言った。

「沼田先輩が、本当に破滅しちゃう」

壊れたココロ その6

市立中央病院付近

ちよつと遅すぎたかなー。

予備校帰りの美奈子は、自習室で友達と長話しすぎたことを後悔しつつ、家路を急いでいた。

この近辺は、街頭がほとんどないせいで夜道は危険だ。

以前、通り魔事件が連発したいわくつきの道なのに、何の対策もとられていない。

『通り魔事件多発！』

『痴漢出没！』

こんな掲示が所々あるところを歩くなんて、美奈子でなくても決して楽しくはない。

むしろ遠慮したい所なのだが、進路がかかっている以上、贅沢は言っていられない。

あぁっ、もうっ！

なけなしの勇気を振り絞った美奈子は、バックから取りだした防犯ブザーを握りしめながら足を速め。そして人とぶつかった。

「きゃっ！」

ぶつかった途端、ふわりという感じで、一瞬、浮揚感を感じた美奈子は、何にもなかったかのように立ちつくしている自分に気づいた。

「あ、あれ？」

「大丈夫か？」

背後から声。

振り替えると、大柄な男が呆れ顔でこちらを見つめていた。

「あ、あのー」

月明かりに照らされた男の顔がはつきり見えた。

そんなに年は離れていない。不良っぽい顔立ちだけど、出てくる声はむしろ諭すような優しい声だった。

「こんな夜道を、女一人で歩くなんて、襲ってくださいっていったようなものだ」

「ち、近道のもりで」

「ふうっー。危ねえから、送っていくよ」

「えっ、いつ、いいですよ！わっ、私」

「自警団のモンだよ。ほら」

男は、『葉月市・葉月警察署公認 NPO 葉月自警団』と書かれたブルゾンの後ろを美奈子に見せた。

自警団ー。

暴力事件が多発する昨今、地域の治安維持のため、住民の中で、特に騎士を中心に発足した治安維持団体。スタンガンを仕込んだ『スタンブレード』などで武装し、酔っぱらいから騎士まで、問題行動者の取り締まりや拘束を警察に代わって行う事が出来る。

男は、自分が名乗っていないことに気づいて、美奈子に言った。

「葉月自警団所属、明光学園2年、新井だ」

葉月市立中央病院付近

児童公園

キイツ -

外灯に照らし出されたブランコが風に揺れる。

しんと静まりかえった公園を一人の女が歩く。

恵美子だ。

焦点が定かではない、虚ろな目の美奈子は、まるで何かに引き寄せられるように歩く。

「？」

歩みを止め、見つめる先にいたのは、小柄な『一応』男の子。
水瀬だった。

「……」

無視するように歩みを再開しようとする恵美子に、水瀬は声をかける。

「待って」

「？」

「知らないの？あの二人なら、死んだよ」

「……死んだ？」

「そう。だから、もう十分でしょ？目的は達したんじゃないの？」

「……目的？」

「自分を傷つけた者達への復讐」

「……」

水瀬の言葉を鼻で笑った恵美子は、むしろ哀れむかのように、水瀬を見つめて言った。

「復讐に終わりなんかない」

手にしたカードケースのフタが音を立てて開いた。

凄まじいまでの『魔素』の放出に、水瀬は思わず身を固くする。

「復讐の女神の作り上げた輪を歩む者には、スタートもなければゴールもない」

その声色に感情はなく、台本を棒読みしているような無味乾燥した、まるで「無」を具現化したような声だった。

水瀬には、その声色に覚えがあった。

一年戦争で、何度も耳にした声色。

忘れたくても忘れられない声色 -。

過酷な戦場でむしばまれ、精神が破滅した者の声。

ギリッ

水瀬は険しい顔で恵美子を睨んだ。

「……復讐に果てはないというなら、次は誰に復讐するの？」

「私を産んだ者、私を育てた者、私にかかわった者、そして -」

カードケースを水瀬に向けながら、恵美子は言い放った。

「この世の生けとし生ける者、すべて」

カードケースから、何かが飛び出してきたのを、水瀬は確かに見た。

児童公園付近歩行者専用遊歩道

「ホント、騎士の人ってタフなんですねぇ」

横に並ぶ新井の横顔を見ながら、恵美子は感心したように言った。

「運が良かっただけさ。まあ、すまん。水瀬とかいうヤツじゃないか」

「へ？」

「見舞いに来た未亜が言っていたぜ？つきあってんだろ？」

「だ、だ誰が、誰とですか！？」

美奈子の反応が面白くて、ついつい言わざるを得ないという顔の新井。

「声、裏返ってるぜ？」

「わっ、わわわワタシが、水瀬クンとツキあつて！？」

「女生徒の間じゃ、有名ないいじゃないか。安心しろよ。俺、シヨタっていわれる見てくれじゃねえし」

クスクス笑いながら美奈子に投げられる新井の視線には、かなりの好奇心が込められているのがわかった。

ワタシが、水瀬君とつきあってる？

百万歩譲って、まあ、大目にみてやろう。

でも、ワタシがシヨタって何？

正太郎コンプレックスがなんだって？

未亜-。

明日、コロス。

「でも、あの事故の後ですよ？よく外に出られるなって」
殺意を忘れるため、美奈子は話題を変えることにした。

「医者には止められているんだ。だけど、色々あって、何も出来ない自分にイライラしててさ。だから、動いていたいんだ」

「……それって、怖いって、意味ですか？」

「うまいな。その通りだよ」

「あの」

美奈子は、一瞬、逡巡した後、思い切って新井にたずねた。

「沼田先輩には、会ったんですか？」

無言で首を横に振る新井は、自嘲気味に笑って言った。

「退院してから、何度も足を運んだ。でも、どこにもいないんだ。学校には行っていたんだろ？」

「いいえ」

「え？」

驚いた表情で足を止める新井。

「私、毎日、先輩のクラスに顔を出しました。でも、毎日、毎日ですよ？欠席してるって」

「そんな」

「おかしいですよ！先輩、どんなことがあっても、学校だけは来ていたはずなのに」

「お、俺」

戸惑いを隠せないという表情で、新井は言った。

「毎日、あいつが見舞いに来てくれるのを待っていた。ベットから動けなかったから、電話、できなかったけど、でも、あいつ、絶対見舞いに来てくれるって信じて、でも、来てくれないのは、あいつが学校に行っているからだって」

「先輩……」

「……行こう。こんなところで考えても始まらない」

新井は、美奈子を促して歩き始めた。

「やっぱり、動いていないと怖いな」

「ヘンなこと、しないでくださいね？」

「ああ。安心していいぞ」

新井は言った。
「といより、言い切った。」

その目には一点の曇りもなかったのを、美奈子は確かに見た。

「俺は恵美子以外の女に興味はない」

児童公園

シュワッ

まただー。

奇妙な感触の後、召還した獣がカードケースへと戻っていく。
何度目だろう。

何度、召還しても、獣はカードケースから出たと思うと、すぐに
ケースへ戻っていつてしまう。

もう一度ー。

「もうやめて。素人がこれ以上やると、冗談じゃすまなくなるよ」
「！？」

ケースから次々と獣が召還され、水瀬の周りに集う。
かわいがった獣達が、自分を慕っていたはずの獣が、今度は私に
憎悪のまなざしを向けてくるー。

「召還獣はね。召還者より相手が強い場合、相手に味方する。力
こそが彼らの価値判断の基準にすぎないからね」

「そんなー」

「君が召還獣を使役できたのは、周囲に呪具を持った君以上に強い力がなかった。ただそれだけ。呪具の力を、召還者の力と見誤った獣達が君にしたがった理由も、その程度」

「……」

カードケースに、獣たちが戻っていく。

「君は、僕には勝てない」

「……だ」

「？」

「何様のつもりだあああっ！！」

怒りに任せた絶叫と共に、恵美子は獣を召還した。

大切な記憶なら大切なだけいい。

その代償にふさわしい獣が召還される。

ケースを手にした時、恵美子は、そう教わった。

だから、それにふさわしい記憶を差し出しただけ。

この苦しみから逃げたいから。

この憎しみがどうにかなるのなら、私は何も要らない。

この憎しみが、今は辛いから。

助けて……。

今、私は誰かに助けを求めた。

忘れてはいけない人はずなのに、今は、その名前すら思い出せない。

……いや、今、私は何を思ったんだ？

わからない。

何も、わからない。

それでいいの？

そう？

そうね。

それでいいんだ。

- まずいな。

水瀬は、内心で舌打ちしていた。

恵美子は何をしたのか、考えたくもないが、目の前に現れたのは、召還獣ではない。

バスほどもある漆黒の巨体に炎をまとった瞳-。

上級妖魔「ヘル・ハウンド」だ。

こんな市街地で上級妖魔が暴れ出せば、その損害は-。

水瀬は騒ぎが大きくなることを恐れ、魔法攻撃ではなく、霊刃による攻撃を決断した。

ダッ

恵美子の命令が下る前に一気に間合いを詰め、巨体の下に入り込む。

ヘルハウンドの前足を切断し、体をひねって喉に刃を突き立てる。

懷に飛び込んで急所を突くのが、大型妖魔の基本的な殺し方だ。

刃の切っ先に魔力をため、一気に魔力を解放。

ゴウッ！

ヘルハウンドの体中で魔力が爆発し、その巨体が一瞬にして吹き飛ぶ。

あたりが一瞬、昼間のように明るくなった途端、この世界に存在をつなぎ止めることができなくなったヘルハウンドは消滅した。

しかし -。

「ちっ！」

ギイン

背後に回した霊刃で弾いて背後からの一撃をかるうじてかわし、間合いをとる。

間違はなく上級騎士級の攻撃に二回、ほぼ同時に襲われた。

敵は -。

一体、沼田先輩は、何を代償としたのだろう。

他人事ながら、心配になる水瀬の目の前には、斧を手にした、二人の青ざめた肌の女性が立っていた。

『デーヴァ』と呼ばれるやはり上級妖魔だった。

人型で、絶世の美女とたたえられる顔立ちだが、その性格は残忍。

人の肉を好む。

戦闘能力の高さは折り紙付きというから、厄介といえば厄介だ。それを二体、ヘルハウンドと併せて三体も召還したというのか？

「勝ち目がない？」

哀れむような眼差しで、恵美子は言い放った。

「それは、オマエのことだろう」

「そう？」

戦場と化した公園に、歓迎せざる闖入者が現れたのは、水瀬が攻撃に移ろうとするか否かの刹那の瞬間だった。

「恵美子！」

「沼田先輩！？」

新井と美奈子だった。

「恵美子、オマエ、何やって……！」

「み、水瀬君、これは一体！」

「二人とも逃げて！」

水瀬の警告がきっかけだったように、デーヴァの一体が、二人めがけて襲いかかる。

「きやあつ！」

「くそっ！」

デーヴァの斧が美奈子の頭上に振り下ろされる瞬間、新井が恵美子を抱きかかえて飛び退き、そこを水瀬の指先から放たれた魔法の矢がデーヴァを貫いた。

155ミリ砲のそれに相当する魔法の矢の直撃により、デーヴァの華奢な胴に風穴があいたと思うと、デーヴァもまた、この世から消滅した。

「恵美子！やめろ！」

新井は恵美子に呼びかけた。

「こんなことして、なんになるんだよ！」

「……何よ。さつきから、恵美子恵美子って」

「なっ」

「馴れ馴れしくない？」

「恵美子……」

その言葉に、新井は全身の力が抜け、水瀬は恵美子が代償として差し出した記憶が何だったのかを理解した。

「あなた、誰？」

「恵美子……お前、何言つて……」

美奈子を抱きかかえたまま、へたり込む新井を、恵美子はただ、冷たく見下すだけ。

「なあ、何の冗談だよ？恵美子、お前……」

「私はおまえなんか知らない」

恵美子はそう言い放つと、カードケースを再び開く。

「目障りだ。死ね」

「!!」

カードケースから、この世のモノとは思えないグロテスクな生き物が飛び出した。

キシヤアアアアッ

この世に解放されたことを喜ぶかのような叫び声。

形容しがたい容姿。

鈍く光る赤い瞳。

へビのような鱗を纏った醜い体。

口の周りに乱雑に埋め込んだような牙から垂れる唾液。

すべてが、はつきりと認識できる。

「それ」が自分達を喰らおうと襲いかかってくる現実と共に――。

「ひっ」

新井も美奈子も、これほど間近に「死」を感じたことはない。

ただ、「それ」はあまりにも近すぎた。

「死」から逃げられる者は存在しない。

目の前の獣は、新井達にとっては「死」でしかなかった。

だから、突然、目の前に飛び込んできた黒い影ですら、彼らの目には死に神程度にしか思えなかった程――。

ドンッ！

ストロボをまとめて焚いたような強力な光に思わず目をつむった美奈子が、再び目を開けた時、目の前にいつのまにか水瀬が立っていた。

「へえ。そういう防御も、ありかな？」

感心したような水瀬の声に誘われるように、美奈子の強烈な光に奪われた目が、ようやく暗闇に慣れてきた。

その途端 -

「恵美子！」

悲鳴に近い叫び声があがり、新井が飛び出していく。

その先には -

「せ、んぱい？」

恵美子が倒れていた。

倒れた。というよりは吹き飛ばされたというほうが正しいらしい。服はあちこち裂けたり焼け焦げており、血がにじんでいる。

水瀬の魔法によることは明白だ。

その水瀬は、駆け出そうとする新井のベルトを掴んで止めていた。

「放せ！」

「ダメ。このまま行けば殺される」

「恵美子が俺にそんなマネするか！」

「もう、先輩は傀儡にすぎない。それに、殺されてから間違いでした。じゃ僕が困る」

「ワケわかんねえこといつてんな！ テメエのことなん - グハッ」
無造作にベルトを引っ張り、新井の前に出た途端、水瀬の霊刃の

柄が新井の鳩尾にめり込んでいた。

「病み上がりなんだから、ムチャしないで」

ムチャさせているのは水瀬君じゃない。と、さすがの美奈子も思わずにはいらなかったが、水瀬はそんな美奈子の心情を知ってかどうか、新井を美奈子の前に放り投げた。

「グッ」

「先輩！」

美奈子が駆け寄って新井を抱き起こす。

「水瀬君、なんてこと！！」

「追いつめられた先輩のココロの傷は、こんなものじゃない」

水瀬の一言に、二人共、二の句が継げなかった。

「！！」

「彼女をここまで追いつめたのは、誰？」

起きあがろうとする新井に、水瀬は冷やかな口調で語りかける。

その目は、軽蔑にあふれていた。

「失って怖い過去も、欲しい未来もない - 先輩はそうってあの力を手に入れた」

「！！」

新井の顔が蒼白になる。

「そんな」

「『お前は、俺が守る』だっけ？そういうキレイ事言っただけを傷つけつづけたなら」

新井を一瞥し、起きあがろうとする恵美子に視線を戻しながら、水瀬は言い放った。

「今度は傷つけられる彼女を、せいぜい指でもくわえて見てたら？」

「てっ、テメエ」

「これが、君の「結果」なんだからね。さて」

恵美子は、ゆらりと立ち上がると、殺意にあふれた目で水瀬をにらみつけた。

「キ・サ・マ」

「召還獣を楯にするってのは考えたよね。無意味だけど」

「……私をバカにしているのか」

「うっん」

水瀬は首を横に振った。

「始末する敵に、情けも哀れみもかけないことにしてるから。大

体」

視線を恵美子ではなく、カードケースに移す。

「ホントに乗っ取っちゃったみたいだね。でも、結局は『モノ』にすぎない相手に、何をどう考えろっていうの？」

「！！」

驚愕の表情を浮かべる恵美子。

「ちよつとは考えればわかるでしょ？新井先輩を殺したいからこそ、手に入れた力なのに、どうして最も殺したい相手を忘れる事が出来るの？憎しみの対象を」

「黙れ」

「記憶持^{エサ}つてる、都合のいい対象として沼田先輩を乗っ取ったんでしょ？でも、その程度じゃねえ」

水瀬はため息まじりに、カードケースに言い放った。

「君、バカ」

「黙れえええっ！！」

右腕が鈍く輝いたのと同時に、恵美子は水瀬目がけて騎士並のスピードで突っ込んできた。

ブウンッ！

振り下ろされる右腕はあっさりと水瀬の手にした霊刃によって受け止められる。

霊刃によって止められたのは、右腕から伸びた「かぎ爪」。

霊刃とかぎ爪同士のエネルギーのぶつかり合いが、周囲を照明のように照らし出す。

「代償としての記憶なんてウソでしょ？君」

「黙れといっている！！」

血走った目でにらみつける恵美子を、水瀬はただ、冷やかに見つめる。

「君は記憶を食べることで生きている。だから、そういう甘い言

葉で人をエサにしてきたんじゃない？」

「黙れ黙れ黙れえ！！」

人間離れた力でかぎ爪を何度も振り下ろす恵美子の腹を、水瀬は遠慮もなく蹴りつけ、恵美子を吹き飛ばした。

「グフッ！！」

見事な弧を描き、噴水の縁石に叩きつけられた恵美子に水瀬が近づく。

「記憶って、そんなに大切にする人、少ないもんね。よく考えたとは思うけど」

うつぶせのまま動かない恵美子の肩に手を置いた途端、水瀬は勢いよく跳ね起きた恵美子にカードケースを押しつけられた。

「？」

「死ねえ！！」

零距离で召還獣を腹に受けた水瀬は、ぶつかった召還獣と一緒に吹き飛ばされた。

「！！」

「水瀬君！」

未だ動くことが出来ない新井を引きずるようにして現場から逃げようとする美奈子が、巨大な「何か」と共に宙を吹き飛ばされる水瀬に、思わず悲鳴に近い声を上げた。

「おい……」

新井は苦しい息の下で、美奈子に言った。

「俺を置いて逃げる」

「バ、バカ言わないでください!」

首根っこをつかんで必死に引きずる美奈子に、新井は言った。

「じゃ、せめて他をつかんでくれ。さっきから口クに息もできねえぞ」

「あ、ごめんなさい」

脇腹に手をやると、今度は新井が悲鳴を上げた。

「イテエ! 傷口開いちまう!」

「どこつかめっていうんですか!」

「自分で考えろっ! っていうか、俺を置いて逃げろっつてんだろっが!」

「出来ないっていつてるんです!」

「俺は騎士だ。カタギを巻き込むわけにはいかねえ!」

「ヤクザじゃないんだから!」

思わずにらみ合う二人だが、不意に新井がため息と共に肩をおとした。

「……ったくよお」

「……せつかくなんだからキメさせろよなあ」

「先輩……?」

「もう、いつ死んでもいいんだからさあ」

自嘲気味に、クツクツと喉で笑う新井に、美奈子は言った。

「ふざけないで!」

「ああ?」

「せめて死ぬなら、落とし前つけてからにしてくださいよ! 男でしょ!」

「落とし前だあ?」

「先輩、何を見ているんです!? 沼田先輩、あんなにしちゃったのは誰なんですか!? 先輩じゃないですか! 女の子をあんな風にし

て、自分は知りませんで死ぬなんて、そんなの勝手じゃないですか
！」

「……」

「沼田先輩が許すっていうまで生きて、それから死んでください
！そうでなきゃ、私、先輩を許せません！」

壊れたココロ その7

「さて」

目障りな邪魔者がいなくなった恵美子は、鷹揚な態度で新井達に言った。

「顔を見られた以上、生かしておく訳にはいかない」

「恵美子……くそっ！」

ここで俺が殺されるのは、まあ、いいだろう（ホントはやだけど。

）

だが、この子まで巻き込むわけにはいかない。

なんとかこの子だけでも逃がさないと -

新井は美奈子を抱きかかえ、一目散に逃げに打ってでようとして -。

グンッ

「なんだと - ?」

それが出来ない現実を認めざるを得ない自分に気づいた。

いつの間にか、新井の右足には長い何かが巻き付き、動きを封じられていた。

「な、なんだ？」

一瞬、紐かと思ったそれには、生理的な嫌悪感を感じずにはいられないグロテスクな模様が刻まれ、それ自体がうごめいていた。

「 - ひっ」

それが何か気づいたのは、美奈子の方が早かった。

へびだ。

「畜生め！」

新井はスタンブレードを抜くと、へび目がけて振り下ろす。
が、

ガチンッ！

という金属音がしてブレードがはじき返された。

生き物相手に剣を振り下ろし、

金属音と共に

弾き、返された…？

「な、何？」

新井は、呆然として弾かれたスタンブレードの刀身を見た。

例え、ハードラバー製で殺傷力は低いとはいえ、スタンブレードの使用者に法律で禁止されている技がある。

それが突き技。

刀剣の形状をとる以上、この攻撃だけではどうしても本物に近い殺傷力がある。

本物にやや劣る程度の一撃を、弾かれたというのか？

・こいつだって、生身だろ？

だったら、サイコブレードを、金属みtainな感じではじき返すなんてこと、あり得ないことだ。

いや、あつてはならないことだ。

そのはずなのに…。

その一瞬の油断が、新井をさらなる危機へと追いやった。

「そんなオモチヤが効くわけないだろうが」

すぐ間近でした恵美子の声。

見上げると、恵美子が立っていた。

もう、逃げられない。

「くっ」

よく考えてみれば奇妙なものだ。

今まで、恵美子に様々な感情を持ったことはある。

愛情、思慕、怒り、哀れみ、悲しみ。

だが、たった一つだけ持ったことのない感情があった。

それは、恐怖。

それが今や、新井の心を支配していた。

「くそおおっ!!」

それから逃れるように、新井はスタンブレードを恵美子目がけてつきだした。

「ふん」

恵美子は鋭い一撃を軽く受け流し、そのつま先で新井の顎を蹴り上げた。

「ぐっ」

新井の体がのけぞり、宙を舞った後、頭から地面に落ちる。

「先輩！」

「お前風情が私に刃向かうなど、考えるだけ無駄だ。馬鹿者が」
「先輩！どうなっちゃったっていうんですか！？あんなに優しく

った先輩がなんで――

新井に駆け寄った美奈子の叫びに、きよんとする恵美子。

「優しかった？」

「そうじゃないですか！中学で私達、どんなに助けられたか――」

「優しかった――か」

「先輩、元に戻って――」

美奈子の目には大粒の涙がうかんではこぼれていった。

「あの時、この娘も似たようなことを口にしていたな」

訳のわからないことを言う恵美子の姿に、美奈子の混乱は増すばかりだ。

「圭ちゃん、やめて。なんでこんなヒドイコトするの？とな――ん？」

じつと新井を見つめた恵美子は、感心したように言った。

「そうか。お前が圭ちゃんとかいう奴か。なるほど」

グッ

新井の胸ぐらを掴んで視線を合わせる恵美子の顔に優しさは微塵もなかった。

「おい」

その顔の前に右手をちらつかせ、まるで新井を値踏みするかのようにつに言った。

「見る」

外灯に照らし出された白い手。
新井が求め、愛した手。

「この手で、何人、死んだか、わかるか？」

「！？」

「よく見る。この血まみれの手を」

「なつ、何を言っている？ 恵美子の手が血まみれ？ そんなことは」

「ある。この血まみれの手か何よりの証拠。生きてまま召還獣に
食われる人間を見て笑っていた女の手だ」

「ウソだ。そんな、そんなのウソだ！！ 冗談じゃねえ！ 恵美子は
虫一匹殺せるような女じゃ - 」

「そのウソを現実にしたのは、いわばお前だ。 虫一匹殺せない女
をここまでしてのけたのがお前だ」

「ち、違う！ 俺は恵美子を」

「守るといつて近づき、傷つけ、慰み者にしたのは、お前だ。 こ
の娘が心から信じてきた約束を踏みにじり、反故にしたのは、お前
だ」

「俺は約束を！」

「約束とは何だ？」

「それは -」

新井は言葉を失った。

守るといいながら、守りきれなかった自分。

守らねばならないのに、傷つけ続けた自分。

俺が果たさなければならなかった約束とは、そして、恵美子が信じていた約束とは？

何もかもわかったようで、何一つわかっていなかった自分を、新井は恐れたからこそ、こうして何かを求めるように動いていたのだから。

恵美子は心底見下したという顔で胸ぐらを掴む手に力を入れた。

「忘れていたろう？だからこそ、この娘はここまで堕ちた」

「くっ」

「聞け。教えてやろう。冥土の土産にな」

恵美子は語り出した。

沼田恵美子の記憶より

肌がじつとりして気持ち悪い。

やっと終わった行為の後で、圭ちゃんが私を解放してくれた。

腕枕が少しだけうれしく感じられるようになったのは、私が変わったからかな。

「ねえ、圭ちゃん」

そつと圭ちゃんの胸にすがりながら、ちょっとだけ甘えてみる。

「約束、覚えてる？」

「なんだそれ」

「もうっ、小さい時、約束してくれたこと！」

「忘れた」

「いじわる」

それが、冗談だから、私はすねた振りをして反応を待つ。

冗談なんだよ。圭ちゃんの。

でもー。

「ガキの頃の約束なんて、大人になれば無効じゃねえか。お前も
とつとそんなクダらねえこと忘れちまえよ」

え？

「無効……？くだらない？」

何も考えられない。

何も感じられない。

うそ。

うそよ。

そんなことない。

あの約束は、私の全てなんだから。

うそよ。

無効じゃない。

くだらなくなんてない。

圭ちゃん、すぐに言ってくれるよね？

うそだつて。

でも、圭ちゃんの口から出てきた言葉は、

違った。

「俺が言っただろう？その俺が忘れてるってことが何よりの無効の証拠じゃねえか」

「……」

「な、それより」

私は圭ちゃんに抱き寄せられ――。

街はいつのまにか雨が降っていた。

お腹が痛い。

傘もささずに町中を歩き続けて何時間たっただろう？濡れ鼠の体が冷え切っているのがわかる。

どうせなら、このまま凍死してしまいたい。

死にたい。

死ねば、すべてが終わるから。

お母さんが、そうしたように――。

あの時、私は、お母さんは「すべて」から逃げたと思った。卑怯だと感じた。

でも、

今は、逃げる事が出来たお母さんが、うらやましい。

そして、商店街の端に新しく出来たらしい骨董品店の前に、私はさしかかった。

「まあ、そこで呪具たる私に出会ったのだから、私としては感謝すべきかもしれないな」

「う、うそだ。俺が、恵美子を死ぬほど絶望させたなんて。俺は恵美子を」

「お前に関わった近頃の記憶で、この娘が幸せだったという記憶はない」

「うそだ！そんなの！なあ、頼む、ウソだと」

「まごうことなく真実だ。だからこそ、自暴自棄になったこの娘は自らの死を、そして、積もり積もった恨み故に、お前の死までを願うようになった」

恵美子は冷然と新井の胸ぐらから手を放すと、放した手にあのかぎ爪を作り上げ、それを振り上げた。

「故に、お前を殺す理由は3つになった。一つ、私にとって邪魔だから。二つ、この娘が殺したいと願ったから。三つ、お前自身が、死にたがっているからだ」

「……」

呆けたまま、かぎ爪を見る新井の表情に、生きる気力は全く感じられなかった。

「死にたいという顔だな。ならば、惚れた女の体で殺してやる。感謝しろ」

言葉と共に振り下ろされるかぎ爪の動きを、新井は、ただ、虚ろな目で眺めるだけだった。

新井が死を待ち望む中、

「グッ!!」

振り下ろされるかぎ爪が新井の頭を砕く直前、恵美子の背中が爆発した。

「なっ!?!」

「!」

「きゃっ!」

とつさに恵美子と美奈子を抱きかかえ、新井は、二人を守る形で吹き飛ばされた。

「あちゃ〜」

そして、三人がまとめて吹き飛ばされる光景を、非常に気まずいという顔で見つめるバカが一人。

「ごめんねえ!魔力調節しそこなっちゃった。あはははははっ」

乾いた笑い声でごまかそうとするのは、あの時、召還獣と共に吹き飛ばされたはずの水瀬だった。

「――生きてる？」

「この野郎！後で面貸せ！」

「水瀬君覚えてなさい！？」

怒り心頭の二人に抱えられる形でぐったりとしている恵美子からの反応はない。

魔法攻撃をマトモに喰らったのだから、そのダメージはかなりのものとなっているはずだ。いくら呪具に乗っ取られているとはいえ、元は生身の女の体にすぎない。

下手をすれば死ぬ。

運が良くても、どんな後遺症が残るかわかったものではない。

水瀬が心配したのはそこだった。

「その話は後で。二人とも、彼女からカードケースを取り上げて」「はあ？」

「カードケースさえなければ、先輩は元に戻る」

・多分。と自信なさげな言葉は、二人には届かなかった。

が

「くっ・ああああああ――！！」

目を覚ました途端、新井の胸の中でのけぞりながら絶叫する恵美子。

「くあああああああああつつつつつ！！！」

白目を剥き、叫び続ける恵美子は、誰の目にも常人ではなかった。
「体が限界だよ！急いで！」

水瀬の鋭い声を受けて反応したのは、恵美子の方だった。

新井を突き飛ばし、ふらつきながらも立ち上がる恵美子。

「キ、キ、サ、マ、ア」

すでにフタの開けられたカードケースからは凄まじいまでの魔素があふれ出て、水瀬の目には周囲が黒いモヤがかかって見えた。

「いい加減、先輩は諦めた方がいい。君だって危ないんじゃない？」

「キサマを殺すためなら、このオンナなんぞどうでもいいわ！このオンナの「最大の代償」を使えば」

魔素がガスのように吹き出し、召還の準備が始まったらしい。

上級妖魔まで召還した呪具だ。

何が出てくるかわかったものではない。

しかし -。

「-ぐあつ！」

突然、恵美子が頭を抱えながら悶えだす。

「き、キサマ！渡せ！記憶を渡せ！この記憶なら、これだけの記憶なら、あの獣をお！」

「！？」

誰かの抵抗を受け、思うように進まない召還。

その隙について動いたのは、水瀬ではなく、新井だった。

「恵美子！すまん！」

新井のスタンブレードの一撃で隙を作った新井は、

「こんなものがあ！！！」

怨嗟の声を上げながら、恵美子の左手から文字通り呪具をむしり取り、水瀬目がけて投げつけた。

「やっちまえ！」

「ちゃんね」

ザ
シ
ユ
ツ
！

カードケースが霊刃で一刀の元に切り捨てられた途端――

「ギヤアアアアアアアッツツツツ！」

凄まじい悲鳴と共に、恵美子の体から靄のようなモノが浮かんできたと思うと、周囲の魔素を強力な掃除機のように吸い込み続ける呪具の残骸の中に飲まれていくなかで、

「あの娘が、あの娘が「あの記憶」さえ渡しておればああああ

水瀬の耳に、そんな無念の叫びが聞こえた気がした。

あたりに静寂が戻った。

「大金星だね。新井先輩」

今になって全身に走る痛みのせいで動けなくなった新井に手をか

ざす水瀬。

ポウッ

かざされた手に中がほのかに光り輝き、かざされた箇所痛みが和らいでいく。

療法魔法

別名ヒーリングとも呼ばれる癒しの魔法だ。

新井の体中の痛みがウソのように消えた。

「恵美子は？」

「あそこ」

アゴでしゃくられた先には、へたり込んで呆然としている恵美子の姿があった。

「恵美子！」

「ギャッ！グエッ！」

水瀬を殴り倒し、蹴り飛ばし、突き飛ばし、スタンプブレードで10回くらい本気で殴りつけた挙げ句に、踏みつけながら新井は恵美子に駆け寄った。

後には、地面にめり込んだまま、新井の足形のついた水瀬が横たわっていた。

「ふうっ、なんだか私、こんな役ばかりね。今回」

美奈子が地面から水瀬を引っ張りだしながら、そうぼやいた。

「恵美子！おい、恵美子！」

「……」

新井に肩を揺すられても反応しない。

「おい！しっかりしろ！恵美子！」

「……」

まるで呼びかけが聞こえていない。

夜空を、そして、心配そうにのぞき込む新井の顔を見ているはずの目の焦点はあっていない。

ただ、新井に揺すられるだけの恵美子は、まるで等身大の人形のようだった。

「水瀬！おい、なんとかしてくれ！恵美子が！」

さっきの療法魔法のこともある。

一縷の望みをかけて呼びかけた水瀬の反応は

ふるふる

悲しそうな顔でただ、首を横に振るだけ。

「もう、記憶が破壊されているはずだよ。先輩はもう、何もわかんないはず。新井先輩が誰で、ここがどこか」

「……そ、そんな」

その最終通告に、新井の目から涙がこぼれ落ちた。

「うそ、だろ？」

「自分が誰なのか、それすら先輩にはもう……」

「だって、俺、俺は……」

俺は、恵美子を守るって約束したんだ。
それなのに、俺は……

俺は、何をやってきた？

彼女をこんな風にしたのは、誰だ？

俺じゃないか。

俺は――。

「許してくれ恵美子！俺は、俺は――！」

止める事が出来ない涙をそのままに、恵美子の胸に顔を埋めて、
新井は男泣きに泣いた。

そつ。

「！？」

「！！」

不意に、新井の頭をなでる手があった。

恵美子の手だった。

「どうしたの？何を泣いているの？」

不思議そうに小首をかしげる恵美子。

「え、みこ――」

「まさか」驚きの表情を浮かべる水瀬。

「記憶が完全に失われていなかったの？」

水瀬は不意に、呪具の最後の言葉を思い出した。

- あの娘が、あの娘が「あの記憶」さえ渡しておればああああ -
呪具に抵抗するには余程の精神力が必要なはず。というか、不可能と言いつける。

だが、それでも守りぬいた記憶が、先輩にはあるというのか？
水瀬は、携帯電話で後方待機中の部隊に短く通信した後、だまつて経過を見守ることにした。

「あなた、だあれ？」

「圭一だ。新井圭一。って、知らないか」

水瀬の言葉は本当だった。

恵美子は自分のことを忘れている。

俺が誰なのか。

俺とかわした約束まで含めて -。
全てを -。

「圭ちゃん？」

「!!」

新井は目を見開いて恵美子を凝視した。

「圭ちゃん、いつの間にこんなに大きくなったの？」

小首をかしげながら、不思議そうに言う恵美子。

「- ははっ。いつかな」

涙に曇る声で、新井は笑った。

自分の名前を覚えてくれいていたこと。

それだけで奇跡なんだだから。

「うわっ。私も大きくなってる。ほら」
驚いた様子で自分の胸を掴む恵美子の顔は、無垢な子供のそれだった。

「さわってみる？」

「ばっ。ばか！」

「でも、どうして泣いてるの？ 転んだの？ どこか痛いのか？」

「そ、そんなんじゃない」

涙をぬぐい、精一杯の笑顔を浮かべてみせる新井。

「ち、ちよっとな」

「ダメだよ。約束なんだから」

「や・く・そ・く？」

「私のこと、守ってくれるんでしょ？」

思い出した。

約束を交わしたときの恵美子の笑顔と共に――。

夕焼けが景色をセピア色に染める世界で、恵美子は泣いていた。

『ほらっ。泣くな！ 俺が守ってやるから！』

泣き虫だった恵美子に新井は何度そういったらう。

『ホント？ 本当に？』

『ああ。お前は俺のヨメさんになるオンナだからな！』

マセガキというもんだ。だけど、何のドラマのセリフだったか
忘れたけど、このセリ　フの度に、

『うんっ!』

安心しきった顔で見せてくれた笑顔を、オレはなぜ、忘れたん
だろう。

「だめですよおだ。私をお嫁さんにしてくれるんだから、もっと
しつかりしないとね?」

悪戯っぽく、しかし、心からの笑顔。

一体、この笑顔を、俺はどれだけの間、失っていたんだろう。

ああ。そうだ。

新井は思う。

俺は、この笑顔のために、力を持ったんだ。

俺の力とは、この笑顔を守るための力だったんだ。

今からでも遅くないのなら、償えるなら、俺は、なにも惜しむま
い。

恵美子の笑顔を、今度こそ守り抜いてみせる。

そのための力なんだ。

そのために、俺は生きているんだから。

そつと恵美子を抱きしめながら、新井は言った。

「ああ。そうだな。もつとしつかりしないとな」

抱き返しながら、穏やかな表情を浮かべる恵美子は安心しきった声で言った。

「うんっ！」

翌日

明光学園中庭

「新井先輩が転校？」

「恵美子先輩が施設に入るでしょ？だから、施設に近い学校に転校するんだって」

約束通り昼食をおごらせた美奈子が、水瀬から最初に知らされた後日談がそれだった。

恵美子は保護され、現在も検査が進んでいるが、施設に入る必要がある。

新井はそのことを知っており、施設近くの学校への転校を希望している。

「——今度こそ、守るつもりでしょうね。先輩は」

さすが。と呟いた美奈子は、満足そうな笑顔を浮かべて晴れ渡っ

た空を見上げた。

「どっかの誰かさんとは大違いね」

「……誰のこと？」

放課後

喫茶「南の風」

「調べがついたわよ」

相変わらぬの食べ終えた食器の山越に見る理沙の顔。

「ありがと。早かったね」

「まあ、ね」

あまり気乗りしないという声に、水瀬は眉をひそめた。

「掻い摘んで話すけど、いい？」

「うん」

「まず、君から依頼のあった新井圭一と沼田恵美子は、君の読み通りだったわ」

「なんか似てるとは思ったけど、まさかね」

「共に父親は、旧姓沼田伸也。沼田恵美子の母、沼田礼子の実の兄よ。つまり、恵美子はそういう関係から生まれた子になるわ。」

二人がそういう関係になったのを知った周囲が二人を引き離す意味で、兄を遠方の家に婿養子に出し、世間体から恵美子を放逐したところが、二人の関係は、影にずっと続けられたか、時期的にはもう、引き離された時点で妊娠していた可能性もあるけど、とにかく結果として圭一と恵美子二人が生まれた。

ただし、沼田伸也は三人目の顔を見る前に死んでいるわ」

「運命 - かなあ」

「随分皮肉な - ね。沼田伸也の死後、沼田伸也の妻、新井房江は知人のツテで二人の子供を抱えて、この街に移り住んだ。そして、二人の子供が出会ったわけね。随分と仲がよかったみたいだけど、沼田礼子も、圭一が生まれたことは知っていても、顔も見ただことないだろうし、まさか目の前の子供が兄の子だなんて考えもつかなかったでしょうね」

「でも、いつしかそれがわかった」

「これからは多分、私の想像だけだね」

頬杖をつきながら、フオークでハンバーグをつつつく理沙。

「わかったのが、礼子の自殺の原因じゃないかって、そう思うのよ。近親相姦の子よ？ 普通は罪悪感持つわよね。その子が自分同様、例え腹違いとはいえ、血の繋がった兄とつきあっていることがわかったとしたら？ 思うにその罪悪感から - 」

首をキュツという仕草をする理沙。

「 - 多分、そんなトコロじゃない？ 恵美子先輩がそれを知っていたかどうかは、今となってはわからないけど。ところで、捜査についてだけど、警察の方では？」

「近衛同様、迷宮入りよ。調査資料は？」

「処分しておく。こんなこと、公に出来ないし」

「そうね。で、肝心の沼田恵美子は？ どうなの？」

「重度の記憶喪失患者として精神病院で長期カウンセリングが必要らしい。人格が完全に破壊されたわけじゃなくて、幼児化してい

るようなものだって報告受けている」

「じゃあ！」

「失われた時間は戻らないけど、作っていくまでには復活できるはず。退院する日がいつになるかわかんないけど、これから未来と過去を作っていけばいい。そう思う」

ティーカップを置いた水瀬の表情は、どこかほっとしているように見えた。

「奇跡って言葉、なんだか信じたくなかった」

都内某病院

中庭

昨日までの雨がウソのように晴れ上がった空の下、

「圭ちゃんこっちこっち！」

無邪気にはしゃぐ恵美子の姿があった。

「おいおい、また転んで婦長さんに怒られるぞ？」

その後ろには、ややあきれ顔の新井の顔があった。

「大丈夫よ！」

恵美子は、元気よく自信満々に答えた。

「圭ちゃんが守ってくれるもん！」

勘弁してくれよ。とは思わずにはいられなかったが、その澄んだ瞳に微笑まれると、

しゃあねえか。

とも思う。

だから言おう。
心からの誓いの言葉を。

「俺が、お前を守ってやるんだからな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2268b/>

壊れたココロ

2010年10月12日06時56分発行